

GF

ジェンダーフォーラム
通信
GENDER FORUM PRESS
GF 読書会エッセイ集

和光大学 ジェンダーフォーラム 〒195-8585 東京都町田市金井ヶ丘5丁目1番1号 和光大学ジェンダーフリースペース(G112) TEL 044-989-7777 内線4112 gen-free@wako.ac.jp

INTRODUCTION

GF読書会の8年の歩みを振り返って

<読書会の歩み>

GF 読書会は、私が和光大学を定年退職した 2012年に、大学院の井上ゼミの延長として始まった。当初は「木曜研究会」と呼んでいたが、2014年度に WAN（ウィメンズ・アクション・ネットワーク）と連携するに当たって、「和光大学 GF 読書会」を名のることにし、半期ごとに活動報告と新入会員募集を WAN サイトの女性学講座コーナーに掲載することになった。和光大学の HP や『GF 通信』にも、活動報告等を載せている。

授業期間内は、ほぼ毎週 G 棟のジェンダーフリースペースで、課題図書を読んだ。この8年間の活動の歩みを年表にまとめてみた。輪読文献は、毎年、参加者の希望や、たまたま話題になった本や、井上が関係しているイベントなどの関連で、かなり場当たり的（良く言えば柔軟）に採用した図書も多く、厳格な一本線が貫かれているわけではない。

だが、私が選書の際に心がけてきたのは、広い意味での日本のフェミニストたちの自伝や伝記を読むことだった。まず 2013-15 年頃には、日本初のフェミニスト雑誌『青鞥』を創刊した平塚らいてう、社会主義婦人論の論客で戦後は初代労働省婦人少年局長として活躍した山川菊栄、婦人参政権運動のリーダー市川房枝、母性主義を標榜する思想家であり女性史家であった高群逸枝など、日本を代表するフェミニストたちの自伝を集中的に読んだ。

2016年以後は、労働省から出発し評論家として国会議員として、戦後の女性運動をリードしてきた田中寿美子、赤松良子、樋口恵子、70年代のウーマン・リブとその後のフェミニストたちのインタビュー集（松井久子編『何を怖れる』）などを、かなりハードなスケジュールで読んできた。存命

の方々の証言を読むことは、身近でわかりやすい半面、好悪や尊敬の感情が先に立って、距離を置いた議論になりにくい面もあった。

2014年の NHK 連続テレビ小説「花子とアン」の原作、村岡恵理『アンのかごー村岡花子の生涯』を読んで以来、古川智映子『土佐堀川一広岡浅子の生涯』と広岡浅子『自伝』、大橋鎮子『暮らしの手帖』とわたし』と津野海太郎『花森安治伝』など、NHK ドラマの関連本を採り上げた時期もあった。

<女性の人生記録には、各時代のジェンダーが反映されている>

なぜ女性の自伝や伝記にこだわるかと言えば、まず第1に、私自身がフェミニストたちの生き方に興味があることだ。女性の生きた軌跡には、それぞれの女性たちが生きた時代や階層や地域を包むジェンダーの構造が反映されている。と同時に、自分たちを取り巻くジェンダー秩序に何らかの形で抗った女性たち（私は彼女たちを、広い意味でのフェミニストと呼ぶ）の意思や作戦や振舞いの痕跡を見ることができる。



▲「花森安治の仕事展」（世田谷美術館 2017.3）

自伝や伝記が出されている女性たちは、何かを成し遂げた人たちであり、階層的にも限られているから、こうした女性たちの人生記録が、すべての女性たちの人生を代表するわけでは、もちろんない。だが、階層の相違や有名・無名を問わず、女性であるが故に経験せざるを得なかったジェンダーの束縛には、程度の差はあれ、共通したものがあるにちがいない。個々の女性たちの生活と人生に散りばめられたジェンダー秩序と、それへの抵抗の軌跡を読み解くことは、自分の人生途上で選択を迫られる無数の機会に、判断材料として大いに参考になると思われる。

自伝は、作者がそれを書いた時期の人生の自己総括ともいえるので、各人の人生と同時にその人生観を読み取ることができる面白さがある。もちろん、自伝だからといって、記述をそのまま事実として受け取ることはできない。自伝に「書かれていない」何かを見つけて、なぜ書かれなかったのかを探る作業は、知的醍醐味だとは思いますが、読書会の性格上、充分にはできなかった。ただ私たちは、同時代を生きた女性たちの自伝を読みくらべることで、互いが相手をどのように評価していたのか、同じ出来事がどのように違って受け取られていたのかを理解することに努めた。

また、連続テレビ小説の関連本を読む際には、登場人物と作者の関係によるバイアスに加えて、政治や宗教を排して視聴者の許容範囲のジェンダー関係を描写するといった、番組の約束ごとを考慮しつつ、登場人物の実像と伝記との距離や、ドラマの描く人物像とのズレを読み解くという、楽しくもスリリングな作業に挑戦してみた。

＜女性の自伝や伝記は、自由な意見交換の素材＞

女性の自伝や伝記を採り上げる第2の理由は、それらが、女性として育てられ、生きてきた人ならば、誰でも、自分の人生経験に引きつけて、意見を言ったり、疑問を口にしたり、独自の解釈を提出したりできることである。

大学院ゼミの延長形態として開始したとはいうものの、当初から私がめざしたことは、専門研究者の養成でもなく、テーマを絞った研究成果を上げることでもなかった。むしろ、ジェンダーについての知識量や学問的蓄積の多寡にかかわらず、それぞれの参加者が、誰にも気がねせずに、平場で自由に発言し、自分とは異なる意見や感想にも聞く耳をもてる場と雰囲気をつくることであった。参加者一人一人が、自分の中のジェンダーへの捉われに気づき、社会のジェンダー秩序を問い直し、自分らしく生きる力を取り戻してくれることこそ、私がめざした GF 読書会の隠れた目的であった。

そのため、読書会への参加は、年齢不問、社会経験不問、

ジェンダー問題の学習・研究歴不問で、ただ、①毎週輪読予定の章を読んでくことと、②半年に一度はレジュメを用意して担当箇所を発表することだけを条件とした。「学生に戻ってレジメを切り、発表前には心臓ドキドキ。でも学ぶって本当に楽しい。(中略) 教える側に長くいたためにちょっと錆び付いていた、謙虚に学ぶ姿勢を少しづつ取り戻しているような気持です」(故海老原暁子「がんのお姫様、読書会で勉強中」GF 通信 vol.23) という人もいれば、レジュメを切ったり、人前で発表するのは初めてという人もいる。

発表のために何冊も関係文献を読み、皆の知らなかった事実や文献を紹介してくれる人、女性史やメディア史などの専門知識を活かして、表現された内容や表現方法の背景を詳しく説明してくれる人、自分の人生経験に引きつけてテキストに新たな光を当てる人、自分の専門分野の研究動向と関連づけて独特な解釈を提示する人などもいて、テキストに書かれた記述をまとめるので精いっぱいという人たちの理解を補ってくれることも、しばしばあった。参加者の大半は 40 代以上だが、少ないながら 20 代、30 代の人も交じっており、「若い人たち」の意見や感想を聞けるなど、色々な意味での多様性が、この読書会を彩ってきた。

半期が終わるごとに食事会(飲み会)をして、仕事等でふだんは来れないメンバーも顔を出し、よもやま話に花を咲かせるのが、この読書会の楽しみの一つだ。さらに、フィールドワークと称して、輪読した本にゆかりの土地を歩くのも、恒例となっている。2013 年に「『青鞥』の舞台を歩く」と名付けて、本郷から白山を通して巣鴨まで散策したことや、2014年夏に都内各地で開催された村岡花子関連展示を

ハシゴしたこと、2016年には世田谷美術館の花森安治展に出かけたり、銀座近辺で「暮しの手帖」の原点を探し歩いたことなど、一緒に「遊ぶ」ことも、GF 読書会ならではの楽しみ方と言える。

コロナ禍のために、残念ながら今年度は、皆で集まっていた輪読会も学外フィールドワークも断念せざるをえなかった。替わりにせめて、各自が日頃考えていることや、読書会を通じて発見したことなどを文章化して、それを基にオンラインおしゃべり会を開くことにした次第である。いずれ COVID19 の脅威が終息し、平常の読書会が再開できる日が早く来ることを希っている。

(井上 輝子・本学名誉教授)



▲ GF読書会恒例のお食事会(2019.12)

和光大学GF読書会関連年表 作成:井上輝子

年度	輪読文献	サブイベント(学内)	フィールドワーク	GF通信
2012前期	S.ボーヴォワール『決定版 第二の性』I 体験篇	ボーヴォワール監修ビデオ「第二の性」鑑賞		vol.20
2012後期	S.ボーヴォワール『決定版 第二の性』II 事実と神話		生田民家園で紅葉狩り	vol.20
2013前期	平塚らいてう『原始女性は太陽であった』上巻下巻完結編		『青鞥』の舞台を歩く 2013/11/4	vol.22,23
2013後期	『市川房枝自伝 戦前編』		婦選会館訪問 2014/3/6	vol.23
2014前期	竹信三恵子『家事労働ハラスメント』 上野千鶴子『わたちのサバイバル作戦』	竹信講演会(WAN掲載)2014/5/10 上野講演会+昼食会 2014/7/12		vol.24 vol.24
2014後期	村岡恵理『アンのかごー村岡花子の生涯』		「村岡花子と『赤毛のアン』の世界展」(弥生美術館)8/10 +東洋英和学院等 8/30	vol.25
2015前期	宮崎かすみ『オスカー・ワイルド「犯罪者」にして「芸術家」』 松井久子編『何を怖れる—フェミニズムを生きた女たち』 内田雅克『大日本帝国の少年と「男性性」』	宮崎ブックトーク+映画鑑賞 2015/1/13 映画上映会+トーク(井上輝子) 2015/11/7 内田講演会 2015/6/20		vol.26 vol.27 vol.26
2015後期	山川菊栄『おんな二代の記』 高群逸枝『火の国の女の日記』	加納実紀代「高群逸枝と母性主義」2016/4/23		vol.27,28
2016前期	古川智映子『土佐堀川—広岡浅子の生涯』+広岡浅子『自伝』			vol.28
2016後期	大橋鎮子『「暮しの手帖」とわたし』 津野海太郎『花森安治伝』	津野海太郎ブックトーク 2017/12/2	世田谷美術館「花森安治の仕事」展 2017/3/30 『暮しの手帖』の原点を歩く/感じる 2017/11/23	vol.29 vol.29 vol.29
2017前期	井上輝子監修『田中寿美子の足跡』			vol.29
2017後期	女たちの現在を問う会『銃後史ノート4,7号』			vol.29
2018前期	日本のフェミニズムの代表的な文献を読む(戦前編26論文)			vol.30
2018後期	日本のフェミニズムの代表的な文献を読む(戦後編13論文)			vol.30
2019前期	樋口恵子『サザエさんからいじわるばあさんへ』 樋口恵子『私は13歳だった』	市民講座樋口「サザエさんに見る家族の戦後史」 樋口を開むブックトーク 2019/6/4		vol.31 vol.31
2019後期	「婦人問題懇話会会報」J1,14,43号【樋口、井上、奥山論文】 赤松良子自伝『志は高く』	WAN BT「婦人問題懇話会」参加 2019/10/19 NHK「プロジェクトX・雇用機会均等法の誕生」		vol.31

INDEX

＜はじめに＞

井上 輝子 p.1.

＜読書会＞

関 知恵子 p.4.

橘川 真知子 p.6.

細川 英子 p.7.

藤田 彩友佳 p.9.

渡邊 愛里 p.9.

池橋 みどり p.10

下野 道代 p.11.

境 磯乃 p.13.

石田 由美子 p.14.

柳沢 泰子 p.16.

津田 好子 p.18.

＜ジェンダーフォーラム＞

杉浦 郁子 p.21.

宮崎 かすみ p.21.

長尾 洋子 p.24.

宮嶋 隆輔 p.25.

韓 仁愛 p.27.

杉本 昌昭 p.28.

＜おわりに＞

阿野 理香 p.30.

「with 読書」

リタイアした老夫婦にとっては、コロナ禍による日常生活への影響は少なかったと言えるが、5年まえから参加している読書会の中止（10～12月のみオンラインで開催）と、約2ヶ月間の図書館閉館は何より楽しみな読書タイムを私から奪った。そこで、「本を読む」というテーマで徒然なるままに記していきたい。

＜子ども時代の読書＞

美智子上皇后は『橋をかける』のなかで「子供時代の読書が与えてくれた根っこや翼は、私が外に、内に橋を架け、自分の世界を広げて育っていくときに、大きな助けとなってくれた」「読書は、人生のすべてが決して単純でないことを、複雑さに耐えて生きていかなければならないということを教えてくれた」と語られているが、私は上皇后のお言葉に素直に共感できる。

小学校から電車通学であった私には近所の友達がいなかったし、一人っ子でもあったので、家で読書するしか楽しみがなかった。小学校3年生の頃、講談社から創業50周年記念として『少年少女世界文学全集』が刊行され、毎月1回、父が会社の帰りに本屋に寄ってくれた。背は皮、表紙はクロス装と、まるで洋書のようなつくり。表紙は文字が金箔押しだったり、刻印がなされていたりという凝りよう。哲学者の安倍能成、作家の志賀直哉などが監修していて、ずいぶん贅沢な子ども向けの全集だった。子どもの頃読んだ本の記憶は、その内容や挿絵はもちろん、持ち重りや手ざわり、厚みまで伴ってよみがえる。小学6年生まで毎月の配本を心待ちにしていたが、最後50巻目の本を父が電車の棚に置き忘れてしまい、すごく悔しがったのを覚えている。

中学、高校時代は学校の図書室をおおいに利用して、ロシア文学をはじめとして様々なジャンルの本を読みふけていたが、なぜか試験前になると勉強せずに小説が読みたくなってしまうのを止められず、困ったものだった。

＜ラヒリとの偶然の出会い＞

緊急事態宣言後の4月10日、明日から図書館のすべてのサービスが中止とのことであわててリクエストしていた4冊を受け取りに行った。その中の1冊は、紙面は褐色に変色し、字も小さくて読む気がせずに放っておいた。ところが、5月14日の天声人語に『停電の夜に』が紹介され「停電は関係が冷え込んでいた二人にとってだいじな時間になった」

という文章が目にとまり、そのまま返却しようとしていた古ばけた本を再び手にとった。ジュンパ・ラヒリは、この短編小説でピューリッツァー賞など著名な文学賞を総なめにした、インド系新人作家である。初めての子の死産以来、すきま風のふいていた若い二人が夫婦仲を回復できるかどうかと一気に読んだが、ハッピーエンドの期待はたくみに裏切られた。タイミングよくラヒリを取りあげた天声人語のおかげで、みずみずしい感性と端麗な文章で夫婦、家族など親しい関係の中に存在する亀裂を表している9編の短編小説を読む機会を失わずにすんだ。

＜友からのプレゼント 須賀敦子＞

2014年秋、友人から神奈川近代文学館での「須賀敦子の世界展」に誘われた。須賀敦子の名前はそれまで聞いたこともなかった。その展覧会は、須賀の愛したイタリアの風景を導入に、恵まれた幼少時代、留学、イタリアでの結婚生活、夫の死、翻訳者としての活動を経て「ものを書く人になる」という夢を叶えた起伏多い人生をたどる構成になっていた。須賀敦子（1929～1998）は、1990年、61歳で『ミラノ 霧の風景』を刊行し、一躍注目を集めるが、生前刊行したエッセイ集はわずか5冊で、長編小説の執筆にとりかかるも69歳で帰天。カトリックの学校で過ごしたということも身近に感じられて、さっそく全著作を読み始めた。

最初に『ミラノ 霧の風景』を読んだときの衝撃は忘れない。それまではエッセイというと、林真理子や佐藤愛子を思い浮かべ、日常生活を軽いタッチで描いたものと捉えていたが、まったく違うレベルのものであった。読み進むうちにまわりの空気がシーンと静まって、その場面の映像が浮かび上がってくるような不思議なときを過ごした。その後、はたして須賀の作品はエッセイというジャンルに入るものなのかと疑問を抱いていたところ、この6月『霧の彼方 須賀敦子』が刊行された。著者の若松英輔は「須賀敦子はエッセイ、批評、小説、詩、さらには翻訳という領域までを架橋し、そのどれにも取まらない文学の新しい様式を生み出した」と論じており、彼女の作品にあれほどまでに強く引きつけられた謎がようやく解明された。

なお、9月5日の朝日新聞書評欄で、宇野重規東京大学教授がこの評伝を取り上げ「須賀の書いた文章を愛する読者はもちろん、ヨーロッパと日本の間で精神性を真摯に追求めた一人の女性について知りたい人に薦めたい一冊である」と高く評価している。

＜トニ・モリスンの著作と人種差別問題＞

7月17日夜のNHK ラジオ「高橋源一郎の飛ぶ教室」で、

トニ・モリスンのハーバード大学での講演記録『「他者」の起源』が紹介された。彼女は1993年アフリカ系アメリカ人として初のノーベル文学賞を受賞した。この本を読む前の5月末には、ミネアポリスで黒人男性が白人警官に首を押さえつけられて死亡し、抗議活動が世界各地に拡大していた。「人はどうやって人種差別主義者になってゆくのだろうか」という問いにモリスンは「他者化」というプロセスを示して答えている。それについては紙数もないので省くが、訳者である荒このみ氏の解説を読んで、今更ながら黒人問題の深刻さを知った。

トニ・モリスンによると「黒人」はアメリカだけに存在する。彼らは「アフリカ系アメリカ人」とも呼ばれるが、アフリカに住むアフリカ人は、それぞれガーナ人でありケニア人である。唯一の例外は南アフリカ共和国に住む人だが、こうした事実からしても「黒人」が科学的な概念ではなく、文化的な概念であるといえる。オバマ元大統領の父親は、アフリカ大陸に生まれ育ったケニア人で、合衆国の元奴隷を先祖に持たないという点で、白人社会も黒い肌の彼を受け入れやすかった。一方ミシェル夫人はシカゴの貧民街生まれのアフリカン・アメリカンであったため、彼女のおかげでオバマは黒人社会にも比較的たやすく受け入れられたという。

ピューリッツァー賞の『ビラウド』は、生まれたばかりの娘が白人に過酷な目に遭わされぬよう願うあまり、我が手で殺めてしまう母親の内面に迫るもので、実際にあった事件をもとにしている。重く沈んだ気持ちで本を読み終えた8月11日に天声人語で、モリスンと『ビラウド』が取り上げられ、ラヒリの著書に続いてまたもご縁があった。

アメリカ社会にはさまざまな民族的背景を持つ人々がいるわけで、当然ながらそれぞれの関係は複雑になっており、「人種問題」が黒人の問題としてだけとらえられるほど単純ではない。モリスンとの出会いをきっかけに、自分自身に差別意識が潜んでいないか問い続けていきたい。

＜読書とは・・・＞

3年前頃、朝日新聞に大学生の「読書はしないといけないものなのか？読書が生きる上での糧になると感じたことはない」という投書があった。これには思わず「う～ん」と唸ってしまった。読書の楽しみを知っている人にはわかる。本を読むことがどれだけ多くのものを与えてくれるかを。作家の高橋源一郎も「学生運動で逮捕され、拘置所の独房で過ごした7ヶ月間ずっと本を読んで過ごし、ただひたすら考える時間が今のぼくを作った」と語っている。

最近、政治にしても経済、文化にしても、そこに携わっ

ている人たちの言葉が軽くなっているのではないだろうか。じっくりと洞察し、深く考えたところから発した言葉に触れる機会が、以前よりぐんと減ってきている。このことは現代人の読書時間が極端に減ってきていることと、無関係ではないと思う。

しかし、作家の田中慎弥の「格差にあえぐ若い世代からすれば、学生が本を読み、人生や政治について考えていたなど、優雅なおとし話でしかないだろう」という指摘に、高度成長期に学生時代を過ごした私たちの世代は、思想書や哲学書を読んで議論を戦わせる時間と場に恵まれていたわけで、その幸運に気づかされると、安易に若者たちを批判することはできなくなる。

＜ことばのノート＞

「折々のことば」連載 2000回を迎えた紙上対談で、驚田清一氏が学生時代からぐさっと刺さる言葉や自分が揺さぶられた詩をノートに筆写しておられると知り、嬉しくなった。私も若い頃から、本を読んで共感した言葉をしるすノートがあり、今では綴じ糸も切れてインクも薄くなっている。久しぶりにページをめくってみると、目にとまった言葉は「独りとしびのもとに文を広げて 見ぬ世の人を友とするぞこよのう慰むわぎなる」徒然草

「たのしみは そぞろ読みゆく書の中に 我とひとしき人を見し時」橘曙覧

（関 知恵子）



▲『ミラノ 霧の風景』書影

小学生の「さん」づけ呼称と自称「うち」

最近のワイドショー・ネット上で、「友だち同士は『○○さん』と『さん』づけで名前を呼ばなければならない、あだ名は禁止」という小学校があるということが話題になっていました。理由として、互いを尊重する気持ちを育てる・いじめ防止ということで、取り入れる小学校が増えてきたということです。

従来、男の子は「くん」づけで女の子は「さん」づけで呼ばれていました。場合によっては両者共通の「ちゃん」づけで。

私は小学校教師としての後半、1年生を担当することが多かったので、その経験からこの話題について考えてみたいと思います。また、自分をどう言い表すか(自称)についても考えてみたいと思います。

入学式の後、学級の児童の名前を呼びます。その際、私は「これから、みなさんのお名前を呼びますが、男の子も女の子も『○○さん』と呼びますので『はい』とお返事してください。」と話してから、名前を呼びました。

そして、原則として児童に対する呼称は、「さん」で通しました。児童同士の呼称については規制しませんでした。ですが、自然と多くの児童が友だち同士も「さん」づけで呼びあっていました。

私の取り組みは学年としてのものであり、学校全体としてのものではありませんでした。教員の中にもいろいろな意見がありました。『「さん」づけは何かよそよそしい』『「ちゃん」「くん」の方が可愛らしく親しみが持てる』等。

私が「さん」づけに取り組んだのは、その前提として男女混合名簿がありました。名簿では男女を区別していないのに、呼称で区別することの違和感がありました。男女別の名簿が男子が先、女子が後という意識を生み、男女の差別意識を育んでいました。その名簿が男女混合になったのに、名前の呼称は男子には「くん」、女子には「さん」と区別することの違和感でした。

子どもは幼児期、「ちゃん」と呼ばれることが男女ともに多いかと思われます。男の子には「くん」も使われます。小学校入学と同時に幼いながらも児童が「さん」づけで呼ばれ、一人前の小学生として扱われることは大切なことです。教師が子どもを一人の人間としてみる第一歩です。そして子ども同士も互いを尊重する気持ちが育っていくと考えます。男女の別なく、それが公教育の大きな役割の一つ

ですから。

私は残念ながら、学年の取り組みだけで、学校全体の取り組みにはできませんでした。教師の意識もさまざまでしたから。今後、「さん」づけ呼称が全国に広まってほしいと願います。その際、なぜそうするかを十分論議してほしいと思います。教師の間で、児童の間で、保護者の間で。「強制・禁止」では、平等な人間関係は育たないと考えます。

低学年のクラスを多く受け持つうちに奇妙なことに気づきました。2年生ぐらいになると自分のことを「うち」と言う女の子が多いのです。「うち」は関西方面の言葉だと思っていた私は、「うち」と自称する子に「お家に大阪から来た人がいるの?」と聞いてみました。「いない。」ということでした。女の子であれば「わたし」と自称するのが普通だと思っていたので、とても不思議でした。ネットで調べたところ、どうやら全国的な傾向のようです。周りから(姉・同級生など)影響を受けてのことであるのは間違いないと思いますが、なぜ「わたし」ではなく「うち」を選ぶのか、わかりません。

・「わたし」より「うち」のほうが言いやすい?

・「わたし」とは言いたくない?

・友だちと同じ「うち」を使って仲間意識を持ちたい?

などが考えられますが、はっきりしたことはわかりません。「うち」だけではなく「ぼく」と称している女の子もいたことを思い出しました。

正月のテレビ番組を観ていたところ「NHK E テレ 100 分で萩尾望都」で漫画家の萩尾望都は自作の作品の主人公に少年が多いことについて「少年は自由だから」と語っています。「女の子は動くたびに言い訳しなければならない—お転婆だったり、乱暴なことを言ったり、木登りしたりするたびに。少女は制約が多いが、少年は作品の中で自由に動かすことができる」と。

女の子たちは、幼いながらも女の子であることが不自由であると本能的に感じているのでしょうか。せめてできることは自称を「うち」あるいは「ぼく」とすることなのでしょう。それによって「わたし」では得られない「自由への翼」を持つようとしているのでしょうか。

私には二人の孫がいます。小1の男の子と3歳の女の子です。小1の男の子は5歳ぐらいのときには母親の言い方をまねて「○○なのよ」という言い方がかわいらしかったのに、今では「○○だぜ」と乱暴な言葉も使う(行動も)男の子の王道を歩んでいます。3歳の女の子は幼いながらもお姫さま街道まっしぐら—玩具はシルバニアファミリー、アクセサリーセットなど。(与えられたものですが)その彼女にしても「ちえっ」「ふん」などと大人が受け入れがたい言葉を、そのかわいい口から吐き出します。兄の影響を受

けたのだと思われます。しかし、兄の言動は妹ほどには注目されません。おそらく彼女がこれから兄のように自由に乱暴に振る舞えば叱責されることが多くなるでしょう。

男の子ならば軽く注意を受ける程度かもしれませんが、女の子は「女の子らしくない」という評価とともに注意されるでしょう。

孫娘を「ゆずきさん」と呼んだところ、「『ゆずきさん』じゃなくて『ゆずき』」という返事でした。家庭内で両親や兄に「ゆずき」と呼ばれているからでしょう。でも、彼女のはっきりした意思を感じました。

これから成長していく過程で孫娘は、なんと自称するのでしょうか。なんと呼称されるのでしょうか。

私たちはいろいろな場面で、いろいろな呼称・自称を使い分けています。どのように使おうが、人間関係を豊かにするものであってほしいと思います。

(橘川 真知子)

16年生きた雑種犬、茶々

平成元年の春、赤毛の子犬がたのしげに跳ねながら近所の公園の方からやってきました。この時が、共に暮らして16年、人間と同様に年老いていく様子のありのままを見せてもらい、私に老いを教えてくれた茶々との出会いでした。

私の家では、小学校5年の次女志穂が犬を飼いたい、自分で世話をするから子犬が欲しいと訴えていたので、動物愛護活動に熱心な近所に住む方にも、子犬の紹介をお願いしていたのです。この子犬はかわいいし、持ち主を示す首輪もついていないから、志穂に子犬を会わせてみました。志穂は、子犬を抱いて、「この子犬がいい」とハッキリ言いますので、家族全員の了解を得てこの子犬を飼うことになりました。子犬の育て親は志穂です。名前は志穂が「茶々」と名付けました。秀吉の妻の茶々が好きだったからだそうです。

まだ、2～3カ月の子犬なので、最初は玄関のたたきで飼い始めたのですが、狭く知らないところで不安だったので、茶々は、玄関の靴箱の扉の端をガリガリ噛み、今でも、玄関の靴箱扉には茶々の噛み跡が残っています。夫が犬小屋を買ってきました。よろこんでくれるかと思いきや、犬小屋に全く入ろうとしません。それではと、夫が手作りで大型犬用の大きい犬小屋をつくりましたが、やはり、

一度も中に入ってくれませんでした。茶々は犬小屋が好きではなく、地面の上が好きなのだと理解しました。雨の日や夜は、雨の当たらない軒下で丸くなって寝ていました。

当時は、家の前の道路に人の行き交いも多く、人々が往来するのを茶々は飽きずに見ていました。茶々に話かけてくれたり、傍まで寄ってきて話しかけたりする人もいました。多くの出会いを楽しんでいてくれたのかなと思います。性格がおとなしいので、小さい子がたたいても、さわっても、嫌な顔もせず、触らせていました。そのおとなしい茶々が暴れるのは、1年に1回、狂犬病の予防接種です。これには力を振り絞って全力で嫌がりました。一度などは夫の腕を噛んだこともあるくらい、我を忘れて抵抗しました。茶々が最初に受けた予防接種の時は、自転車のカゴに乗っていくほど小さくて、注射をされるとびっくりして私の腕の中でおしっこをし、顔と手足は緊張のあまり固まったままでした。今でもその時の様子が思い出されます。賢い茶々は、2回目からは予防接種会場を替えても、会場の雰囲気や他の犬のにおい、吠える声の意味、白衣の先生を見て察し、嫌がったのだと思います。

食事は最初、私たちと同じものを食べていましたが、玉ねぎが犬の身体に良くない、虫菌予防のためにも良いと言われ、ドッグフードにしました。雌犬なので、最初の生理を迎えた後、動物病院で不妊手術を受けた事以外、一度も病院に行ったことはありませんでした。

私が一番感心したのは、話して聞かせると理解してくれるところです。例えば、選挙の投票会場に一緒にいくと、茶々に「すぐに戻るから心配せず待っていてね」と声をかけて外で待機させます。他の人が茶々に話しかけたり、大きな音がしたりしても、動じずしっかり前を向いて座って待っているのです。お利巧だねと、褒められていました。凛々しい茶々は自慢です。それに、茶々は夫と散歩するときは、しっかり横に歩をそろえて歩きます。勝手に前に進んだりはしません。これもよく褒められましたが、私や志穂と一緒に散歩の時は、張り切って勝手に前に進みます。私たちは茶々にとっては遊び相手だったのでしょう。



▲ 初老の頃の茶々

私は、茶々が生きている時はずっと世話をしていると思っていましたが、茶々がいなくなって初めに感じたのは、茶々の世話をしていたのではなくて、茶々に毎日、たくさん遊んでもらっていたのだという事でした。出かける時の声掛けから、帰宅したときのお礼の言葉、いつも、茶々に話しかけていました。家族に聞くと、みんな茶々とたくさん話をしていたことがわかりました。茶々は黙ってみんなの話を聞き、子供たちの不平不満、悔しい話に耳を傾け、みんなの嫌な事を飲み込んでくれていたのです。茶々、一緒にいてくれてありがとう、話を聴いてくれてありがとう、生きているときにもっとありがとうのお礼の言葉をいっぱい言っておけばよかったなと反省しています。

子どもたちの行事の時は、茶々も必ず一緒に記念撮影しました。子供たちの成長と共に茶々も成長し成犬になっていました。美しい頃の茶々を、子どもたちの対応や自分の事などで忙しく、あまり記憶になく、アルバムを見た時にこんなに美しい立派な茶々がいた事を再認識しました。私の思い出す茶々は年老いた時期の記憶ばかりです。写真を見て、はっきり記憶が抜けていることに気づかされました。その子供たちも、6年後から一人ひとり、家を巣立っていきました。子供たちの声が聴けなくなって、茶々も寂しかったでしょうに、その気持ちを私は理解してあげられず、気づきませんでした。茶々、ごめんね。寂しかったよね。

10年過ぎたころから、夏毛と冬毛の入れ替わりが遅くなってきました。冬になるのに大丈夫かなと心配しましたが、風邪もひかずにいてくれました。13年経過するころから、朝起きると茶々の足に鎖が絡まっていることがありました。もうすでに、茶々の年齢は人間でいえば、70才過ぎです。夫は夜中に、茶々の泣き声がするので泣き止むまで、しばらく外で一緒にいてやる事が多くなっていたそうです。同じ場所をぐるぐる回るのは犬の認知症の初期症状だそうです。散歩にでても、歩き方がゆっくりで、時間も距離も短くなってきて、足腰が弱ってきたなと感じ始めました。5センチの高さの段を登るのにヨロヨロしてなかなか踏み出せないときがあり、大変驚きました。年を取るって大変だなとしみじみ感じました。

次第に一日ほとんど寝ているようになりました。食べて、飲んで、散歩以外は寝ている時間が半年ほど続きました。すると、どうしたことか、以前のような普通に歩ける茶々がいるのです。体が辛い時は寝る。疲れが取れるまで、力が湧いてくるまで寝たからでしょうか、歩き方も元に戻ったように体もシャンとしています。もうダメなのかもしれないと悲しい気持ちでいたのが、ウソのようです。寝ることで、体力が回復して生活が出来るのかなと安心したり驚いたり

です。そのサイクルの交代が徐々に短くなりはじめてきました。いっそうヨロヨロして手足も震えてきました。ゆっくりゆっくり、体力が衰えて、少しずつ出来ないことが増えていくのだなと知りました。

16年目の春、志穂が出産のため、少し早めに実家に帰ってきました。茶々も嬉しかったのでしょう、志穂に散歩に連れていってもらって、楽しそうでした。小学生だった志穂がお母さんになる姿を見て安心したのでしょうか。外が好きな茶々が、志穂と生まれた赤ちゃんの更紗が愛知県に帰った後の冬、玄関ドアを開けると茶々が家の方に向かって座っています。そういうことが今迄一度もなかったので、「茶々、家に入りたいの」とききますと、茶々が玄関に自分で入ってきたのです。おしっこシート敷いて、好きにさせました。10日ほど過ぎると、今度はドアに向いて座っているので、玄関ドアを開けると外に出ました。ヨロヨロだから家の敷地以外には出ないだろうと鎖はつなぎませんでした。それでも、以前は道路に出てしまい、探すのに大変でしたので、今回は隙間なく点検し、外には出られないと思っていました。

翌日の朝、アプローチに丸い茶々のふんが一つあり、茶々の姿がありません。どこから出たのかとあたりを探すと、アプローチのドアの隙間のところに茶々の毛らしきものがひと房風に揺られています。それほど遠くに行けるとは思えないので、すぐ探せると思っていたのですが見つかりません。友達にも応援を頼み、交番に行って、迷子の犬の届けを聴きましたがありません。保健所に電話して、迷子の犬の連絡が入ってないか、聞きましたが見つかりません。さらに翌朝、うっすらと雪が降りました。この寒さであの体でどうしているのか、また、探し始めました。散歩に行ったところを捜しまわり、近所の人に聞いても、分かりませんでした。あの体で遠い所は無理と思うのに、本当にどこにいったのか、保健所にも、警察にも、迷い犬や死んだ犬の事も聞いても情報はありませんでした。

茶々の最後を看取ってやれなかったことを子供たちにメールをして納得してもらいました。ずっと、なにくれとなく世話をしてくれた夫を泣かせないように、姿を隠したのかなと思いました。茶々、最後の世話をしてあげられなくてごめんね。たくさん思い出をありがとう。

(細川 英子)

Book club

「性の商品化」について

最近、ルッキズムやセクシズムへの批判から、有名大学のミスコンが廃止されました。このニュースを見た時、「性の商品化」という言葉を初めて知りました。「性の商品化」という言葉を知った時、私が今まで抱えていた現代の「性」に対する違和感の正体が判明しました。それは、多様な性の美しさが画一化され、商売道具にされ、支配されているということです。脱毛サロンや美容脱毛クリニックでの美容脱毛は最たる例だと思います。

私たちは、すでに蔓延している「体毛」に関する偏見に触れている間に、「女性は体毛がないことが当たり前」だと思ってしまうています。その偏見を、体毛が多い女性が内在化してしまうと、自分自身の身体に劣等感を感じてしまいます。そんな現代の女性の美の基準である「体毛のない肌」に当てはまらない人達の悩みを解決するのが、剃毛や永久脱毛です。この永久脱毛は、全身の施術が全て終わるまでに20万円以上の費用がかかります。そして施術も苦痛を伴うことが多いです。それにもかかわらず、多くの女性が永久脱毛を受けています。

私自身も私の友人たち数人も、バイト代を費やして脱毛サロンに通っていました。他人に見られて恥ずかしい思いをしないため、コンプレックスを隠すためです。「体毛が多い」という劣等感を糧にして回っているこのビジネスを見ていたら、次第に「性が支配されている」という感覚に陥りました。「体毛がない滑らかな肌」という美の基準そのものが、誰かのためにあるように思えてきたのです。そして、女性の「性」や「容姿」は、商品として消費されているということの意味に気付きました。

10代から20代の若い女性の美しさを主に容姿で評価するミスコン、ジャケット写真や内容のほぼすべて女性しか映っていないアダルトビデオ、性風俗やキャバクラ。これらは「女性」という概念そのものを商品化し、販売し、儲けているのです。考えなくても分かることですが、審査員や客はほとんどが男性です。男性のために女性の性が売られている。

このおいしいビジネスに便乗しようと、また男性が男性のために、女性を使って商売をしているのです。そんな世界に慣れてしまったのか、一般のごく普通の女性にも商品になるようお願いしてくる人たちもいます。エントリーもしていないのに、女性の美しさや価値を勝手に評価し盛り上がっている男性たち。アダルトビデオで得た歪んだ知識を披露し、自己満足したい男性たち。品評会や実験台に使

われて不快な思いをするのは大体いつも女性です。「性」や「美しさ」は、他人が判断し、評価やランキング付けをするべきものではありません。

2020年になった今でも、女性の「性」は男性のためにあると考える人たちが多く中で、次世代の子どもたちには間違った価値観が蔓延しないよう、ジェンダー教育の必要性を強く感じています。

(藤田 彩友佳)

Book club

「居る」ことができる場所を求めて

「ステイホーム」から1か月経った頃、私はすっかり「居る」ことが苦しくなっていた。臨床心理士・公認心理士の東畑開人は、著者『居るのはつらいよ ケアとセラピーの覚書』で、精神科デイケアの心理士としての実践から、ただそこに「居る」ことの難しさと苦痛を分析し、ケアの本質を描いている。生産性や有益性に捉われず、生身の自分で「居る」こと。いたるところで存在意義が問われ、「命の価値」を値踏みされているように感じる日本において、自己や他者の「居る」を大切に扱うことは、共通の課題なのではないだろうか。



▲『居るのはつらいよ ケアとセラピーについての覚書』書影

東畑の言葉を借りて言えば、「ステイホーム」は、まさに「居る」を「強制」された経験だった。東畑は、デイケアの日常を例に、「居る」が管理され、徹底されたときの苦しみとひずみを指摘している。そしてそれは、「アサイラム（全制的施設・収容所）」であると述べる。政府が「新しい生活様式」を提言し、いかに「居る」べきかの具体的な方針を示したとき、どれだけの人が居心地の悪さを感じることなく、それをすんなりと受け入れられたのだろうか。

メディアでは、発信力のある多くの著名人が、「暮らし」を大切にすることの尊さや大切さを伝え、「家にいよう」と呼びかけた。それらを目にし、「暮らしを楽しむ」ことに意義や有益性を見出すことができた人もいれば、私のように、健全な表現に含まれる見えない圧力を感じ、「暮らしを楽しむ」ことに適応できなかった人もいるのではないだろうか。感染拡大防止のために、各々が工夫や注意をすること自体は、あって然るべきことだと思う。ただ一方で、多くの人が、「正しさ」の強制によって、じわじわと自由を奪われていく息苦しさを感じたのではないだろうか。そして、その息苦しさを、他者の「居る」に介入することで解消しようとした人もいたのではないだろうか。「コロナ差別」という言葉が生まれたように、「正しさ」を根拠に他者の行いを追及することで、感染拡大防止に協力していると考える人たちも、未だに目にする。

コロナ禍の暮らしは、自分自身に、何の役に立たなくても、ただこの場に「居てもよい」と言える人とそうでない人で、苦しさの質が違ったように思う。私自身もまた、ただ家に「居る」ことに価値を求め、この「経験」を還元できなければ意味がないという思いに捉われ、窒息しそうになっていた。強制された「居る」に心身を適応させようとしたことのひずみは大きかったように思う。

ひとりだけで居場所をつくり、維持することは難しい。他者と触れ合うことで浮かび上がる居場所の手触りを、長引くコロナ禍の生活の中で、忘れてしまった人も多いのではないだろうか。

読書会に参加し始めたとき、私は心の底から「居場所」を求めている。何者でもない自分が、そのままで居てもよい場所。ここに居る「理由」を追及されない場所。存在意義や生産性によって、価値を測られない場所。摂食障がいという数字と成果にこだわる病を克服したばかりの私は、新しい価値観をインストールしたかったのだと思う。読書会で語り合った経験は、「全て」を分かち合っているわけではなくても、そっと見守り、繋がっていられる人がある、という気づきと自信を与えてくれた。そして、「支援」とは異なる「そっと見守る」在り方の心地よさを知ることがで

きた。

人生 100 年時代とするならば、生産性の理論に追い詰められないためには、誰もがいくつかの居場所を持つことが必須だと思う。「かけがえのない」一つだけの居場所ではなく、どこか一つが欠けても何とかなる居場所。私も、そのときの私のままで「居る」ことできる読書会を、ようやく出会えた居場所の一つとして大切にしていきたいと思う。

（渡邊 愛里）
（参考文献）

①東畑開人『居るのはつらいよ ケアとセラピーについての覚書』（医学書院）2019

②ちくま Web エッセイ
(http://www.webchikuma.jp/articles/-/2041) 大塚英志「ていねいな暮らし」の戦時下起源と「女文字」の男たち

Book club

過剰責任行動とフリーライドのあいだ

「過剰責任行動」という言葉がある。本来ならば他の人の責任までを自分の責任範囲だと感じて、他の人が取るべき責任までをとる行動を意味する。食事時に「ご飯食べた?」「お腹空いていない?」とつい聞いてしまっていないだろうか。誰かの空腹を、自分の責任と考えていないだろうか。健在の夫がいるのにもかかわらず、小さい子どもの世話は、自分がひとりで担わなければならないと考えて、実践していないだろうか。共働きなのだから、子どもも幼児ではないのだから、家事はひとりで担わなくてもいいはずなのに、全部、自分でやっていないだろうか。家事の出来にひとり罪悪感を覚えていないだろうか。低賃金のパートで働いているだけなのに、待遇に見合わない強い責任感ががんばってしまっていないだろうか。具体例から想像しやすいように、わが国では、特に女性ジェンダーに広く見られる現象と言える。

他方、「フリーライダー（free rider）問題」というのがある。社会問題への取組や公共政策などの分野で使われる言葉だが、「自らは参加・活動せず結果だけを受け取ろうとする人たちのこと」をフリーライダーと言う。「ただ乗り」とも言う。社会問題の解決にはそれに取り組む市民が必要だが、目的や理念を理解・共有していても、問題解決のために行動す

る人がいなければ運動は成立しない。しかし、すでに運動が起こっている場合には、参加せずとも成果を得られ、それが合理的な選択になることを指す。広げて考えると、そこに住んでいるにもかかわらず、日々発生する家事をほとんどしない場合には、担っている相手にフリーライドしていると考えられるし、子どもの親なのに、子育てに参画していない場合には、もう片方の親にフリーライドしていると考えられる。

「自分の子も人並み程度にはしてやりたい」といった自分の中の後ろめたさや罪悪感に、「よき妻、よき母」のジェンダー規範が迫ってくる。「しないでいる」ことは、過剰責任行動をとるよりも、多くの女性たちにとって、おそらく、かなり難しい。しかし、適切な責任範囲を定め、ひとの責任まで取りにいかないことが、身近な人たちにとっても、適切な責任を果たし、フリーライドしないで済むことにつながる。自分自身がフリーライドしていないか。あるいは、過剰に責任を背負っていないか。適正な責任を背負うことは、簡単なことではない。過剰責任と過少責任で関係性が固定したり安定している社会に暮らしていると、現状を変えるには思った以上にエネルギーが必要だ。しかし、ある事柄について、自分はいずれの立場になりがちになるのか、一度振り返ってみる価値はあると思う。

（池橋 みどり）



▲ 銀座へのフィールドワーク（2017.11）

Book club

GF読書会に参加して好きなエッセイストへの見方が少し変化した件について

私は 2014 年 9 月から GF 読書会に参加させていただきましたが、これまで触れることのなかった本に触れ、更に自分以外の方の読み取り方、解釈の仕方に触れることができ、狭かった「読書」の楽しみが広がり、フェミニズムの世界に触れられたことを、とてもうれしく思っています。

初めて読書会に参加した時のテキストは、「赤毛のアン」の翻訳者である村岡花子の生涯を綴った『アンのかご』（村岡恵理著）でした。同年に NHK 連続テレビ小説「花子とアン」が放映されていて、朝ドラを見ていた私は、興味津々で参加することができたように記憶しています。

テキストを読むことで、村岡花子の生涯だけではなく、柳原白蓮や、片山廣子、広岡浅子、市川房枝といった同世代を生きた人物との比較や、婦人矯風会の活動などについて知ることができました。また、読者会のメンバーの皆様の分かりやすいレジュメや活発な討論を通して、本と TV ドラマでの取り上げられ方や表現の仕方の違いを比較したり、自伝を親族が書くことで起きる弊害についてなど、一人で読んでいるだけでは知ることができなかったであろう何倍もの情報が得られたことに、ひたすら感動しました。ただ、同時に、次に自分がレポートすることを考えると、私ってばまとまらないレジュメと、無いに等しい薄っぺらい記憶と読解力と語彙力で参加するつもりなのか、と、後悔と恐怖に襲われていたことも記憶しています。（もちろん、井上先生を筆頭に読書会のメンバーの皆様はやさしくフォローしてくださいましたので、恐怖も後悔も杞憂にすぎませんでした。）

そして、フィールドワークも企画され、『村岡花子と「赤毛のアン」の世界展』を見学に行きました。テキストを読むだけではなく、異なったアプローチで、また一層の理解を深めることもできました。

それから 6 年余りの月日が経ち、フェミニズムに関する（フェミニズムについて勉強されている方から見ればほんの少しですが、私にとってはたくさんの）様々なテキストと人物に触れることができました。学生の頃から歴史が苦手な、時代の社会情勢にも疎い私ですが、読書会で使用したテキストに触れ、レジュメを作成し、メンバーの方々の報告を聞くことで、遠くの難しい世界だと思い込んでいたフェ

ミニズムというものが、身近で、自分のことなんだな、と思えるようになってきました。

そんな自分の変化を感じていた 2018年、若かりし頃からファンだった酒井順子さんが、『百年の女―『婦人公論』が見た大正、昭和、平成』という本を出版されました。読めば読書会で知ったフェミニストの名前が並んでいるではありませんか。解釈が面白い。なんて素晴らしい分析。本のあとがきに酒井さんは「百年分の『婦人公論』を読むことは、女性を通して日本の近現代史を見る、またとない勉強の機会となりました。大正、昭和、そして平成の女性達と確かに自分もつながっているという事実を、読者の皆様にも感じていただけたなら、こんなにうれしいことはありません。」と書いておられます。それを読み、私もつながり感じましたよー、うれしく感じてもらえますかー、酒井さんがうれしく思ってくれるのならファン冥利に尽きますー、と一人で興奮してしまいました。恥ずかしい…。

酒井順子さんは、2004 年に「負け犬の遠吠え」（講談社刊）で、講談社エッセイ賞と婦人公論文芸賞を受賞されている著名なエッセイストです。著者プロフィールなどに書かれている酒井さんの著書は、『男尊女子』、『地震と独身』、『子の無い人生』、『源氏姉妹』、『ユーミンの罪』、『次の人、どうぞ!』、『家族終了』、『平安ガールフレンズ』などなど。中でも近著『家族終了』は、同じ読書会のメンバーである渡邊愛理さんもWANのサイト内で書評を書かれていましたが(※)、タイトルをただだけで、私の小さなフェミニズム心がかき立てられます。その『家族終了』のなかで酒井さんは、「『家族をつくる』ということは、「楽しいことを諦める」ということでもあります。「もうちょっと、諦めたくないなあ」などと思ってたらだらと踊り続けていたらあっという間に年をとっていき、気が付いたら五十代。昔であつたら、もうそろそろ寿命が尽きてもおかしくない年頃になっています。」とご自分をバツサリ。また、『男尊女子』では「…現代にあって、男尊女卑は御法度です。御法度を知りつつ、嗜好品としての男尊女卑思想に身を任せることに快感を覚える男女は、今もいるのです。その人たちは、嫁と呼ばれたり、主人と呼ぶことを強制されているのではなく、選択してそうしている。…その人達の存在は否定しない私。しかし自分がそうだからと言って他者もそうあるべき、とは考えないでほしいとも思っているのです。」とバツサリ。

なぜ、私はこんなに酒井順子さんに惹かれるのでしょうか。悪口が好き（『たのしい・わるくち』という著書もあります）だから？下ネタ（男性の繊細さについてや女性の身体の経年劣化のことなど、多岐にわたってます）が多いから？ などなど考えられますが、1 番の理由は、同世代（バ

ブル期入社世代）への共感なのだと思います。『男尊女子』の著者インタビューで「1986 年に施行された男女雇用機会均等法世代の私たちは、頭の中では平等と思いつつも、その場を丸く収めたりラクをするために男性を立てがちな世代。自身がどうするかは自由ですが、世間は男女平等に向かっていることを理解してほしいと願います。例えば息子の結婚相手は専業主婦とは限らないわけで、仕事を持つ女性と結婚してもいいようにと家事を教えながら育ててほしい。その小さな差によって、次の世代の意識、ひいては日本の将来が変わってくると思うのです。」とおっしゃっています。今 50 歳を超えた私たちの世代は、男はこうあるべき、女はこうあるべきということに縛られがちな最後の世代と言われています。それでも次の世代にはそんな縛りから解き放たれてほしいと思っています。「負けを認める」が楽、とは言いつつも、より生きやすい世の中になることを願い、日本の将来に思いをはせる酒井さんの著書やインタビューから目が離せません。

思えば以前から、酒井順子さんは清少納言や紫式部といった平安時代の女性から現代女性に至るまで、ご自分も含めた「女性の生き方」についてたくさん書かれています。それってフェミニズムの視点ではないかしら。以前は気づかなかつたけれど、酒井さんの著書を読むことは、フェミニズムに触れていることになるのではないかしら。これからもフェミニストとしての酒井さんを追っかけてみたい。そんな風に思うようになったのは、GF 読書会に参加したおかげなのだと思います。

2020 年は残念なことに、コロナのせいで前期の読書会は中止でしたが、初めてGF読書会の扉をたたいてから、今に至るまでの振り返りをすることができました。6 年前の自分のレポートを見直して下手くそだなと思い、最近のレポートをみて下手くそのままだあ、と恥ずかしくなったり…。



▲「村岡花子と『赤毛のアン』の世界展」チラシ(2014.8)

他の方のレポートを見て羨ましくなったり…。本の中のフェミニストたちが生き生きとしているなあ、それに引き換え私は殻に閉じこもったような代り映えのしない生活をしてるなあ、でも、そんな中でもお楽しみもあって、それなりに楽しくやってるなあと思ったり。根拠はないけど自己肯定感は強めな自分を褒めて（あ、これはバブル世代にありがちな特徴だそうです。）コロナ騒ぎの終息とGF読書会の再開を待つ今日この頃です。

（下野 道代）

Book club

「ユニーク」な大人

昨年からの新型コロナウイルス感染症によって否応なく、これまでの当たり前の日常生活は当たり前でなくなった。仕事に行くことも、友人や家族に会うことも、食事に行くことも、買い物に行くことも、もちろん旅行することも。自粛の名のもとに出歩くことが憚られ、ソーシャル・ディスタンス（正確にはフィジカル・ディスタンス）が叫ばれ、常にマスクをつけて、極力会話をしないことが求められている。この自粛生活の中、何くれとなく予定に追われ、移動し活動する生活から、一人で過ごす時間が多くなり、必然的に誰もが自分自身と対話し、じっくりと考える機会が増えたのではないだろうか。

ステイホームを利用して、断捨離がブームになったり、家庭菜園や料理・DIY といった趣味が増えたり、家族との過ごす時間が増えたりと、ポジティブに変化した人もいる。一方で、誰とも会話することなく 1 日が終わったり、収入が減ったり、いきなり仕事を失ったりと生活自体が揺らいだ人もいる。その人の仕事や生活、立場といった直面する状況によって、当然見えるもの感じるものは違ってくる。

私自身も緊急事態宣言が出ていた 5 月頃は自宅待機になり、必要最低限の食料品を買いに出かける以外、家にこもる期間を過ごした。自分ではどうにもできない社会や新型コロナウイルス感染症への不安感から、仕事の仕方や働き方、生活のあり方、人との関係性を見つめ直し、自分は誰と、どこで、何をして、どのように生きたいのか。何が大切で、何が不要なのかを改めて考えると同時に、実現するかどうかわからないいつかではなく、今いるここで自分にできることは何なのかを幾度となく自問自答していた。

先日たまたまテレビで三島由紀夫の特集番組*を見た。三島というと、文学作品に加えて、軍服を着た「マッチョ」

なイメージと三島事件が印象に残っていたが、番組では「青年とは（何者でもない）中途半端な存在であり、深く物事を考えることで、いつかはユニークな大人になる」との、青年論を紹介していた。この場合のユニークというのは、際立ったありようではなく（「ユニーク≠特別」）、周りに流されず様々なことを熟慮の上でたどり着くその人らしさ（「ユニーク＝自分軸」）を指しているようであった。三島自身の病弱で祖母に過保護に育てられた生い立ちと学校の校風や入隊できなかった戦争体験で思い悩んだ経験、コンプレックスの克服が反映されているとのことだったが、特に強調されていたのは、何よりもまず、深く物事を考えることの重要性を説いていたことだ。「自分はどう生きるか」ということを死ぬまで真摯に向き合っていた晩年のその姿に、ふと「青年の主張」を思い出すと同時に、わが身を省みてハッとさせられた。もう青年ではない自分は、果たして今、三島言うところの「ユニーク（＝自分軸）」な大人になっているだろうか？

「青年の主張」とは、かつて毎年成人の日にテレビで放送されていた、新成人（？）によるコンテスト（1954 年～2004年 1990年以降は「青春メッセージ」）。学校でのこと、会社でのこと、家族のこと、自分の身の回りのことから社会問題まで、格差や不平等、平和について思いを巡らせ、若者らしい正義感で理想や希望、そして時に青い思いの丈を熱弁する番組だ。自分が同世代の頃は、共感しつつ涙を流したり、時に嫉妬しつつ憤ったり、色々と刺激を受けて聞いたことがある。けれど番組はいつの間にか終わっていて、気が付けば私自身、日常生活に紛れてそんな記憶はすっかり忘れてしまっていた。

なぜなら、うまく言葉や態度で表現したり交渉したりできず、ストレスが溜まって疲れてしまうから。「なんで?」「どうして?」と違和感を持ったり、義憤を覚えたり、不満があっても、「まあ、仕様がなか」「そういうもんだよね」と真正面から受け止めずに脇に流して、モヤモヤはモヤモヤのまま放置する。すると、気づかぬ振りをしているうちに、いつの間にかそういうノイズ自体に気づかなくなっていくのだ。それが社会人の処世術であり、大人として折合をつけるように思っていたのだ。

これまで GF読書会では、山川菊栄、市川房枝、平塚らいてう、高群逸枝等々、近現代に功績を残した女性たちの自伝や評伝を中心に上げてきた。それぞれの時代背景、生い立ちの中で、女性としていかに受け止め、選択し、行動したのか。その軌跡を読み解き、時に発表して、他の参加者の解釈や意見を聞き、より多角的な人物像に近づく。とりわけ、他の参加者の解釈や意見を聞くというのが、一

人で読んでいても思いつかない思考の気づきと広がりを与えてもらい、刺激を受ける貴重な時間である。井上輝子先生は無論のこと、他の参加者たちも年齢や子ども・仕事の有無、これまでの生活圈やキャリアがみなバラバラなので、知識や経験による着眼点が様々で自分にはない気づきを得ることができる。もっともこれまでは、そのような女性たちの軌跡をスゴイと尊敬しつつも、歴史の転換点に居合わせた特別な人の話であって、どこかで普通は（自分は）そんな場面や状況に直面していないし、することもないから関係ないと冷めた気持ちで受け止めていた部分があったように思う。

だが、自分の意志で、互いに刺激を求めて、学び合い、考える時間を持つために参加する読書会は、まさに熟慮の場の一つである。と同時に、新型コロナウイルス感染症のもと、誰もが時代や社会の転換点の当事者となってしまった今、まさに読書会に集まっているのは、それぞれ「今、どう生きるか」を真正面から深く考え、自分らしい選択や行動をする「ユニーク（＝自分軸）」なメンバーなのだと感じている。今回のエッセイ集でも個性豊かで「ユニーク」な読書会メンバーのテーマ（愛犬、読書、テレビドラマ…など）は多岐にわたり、今から読めるのをとても楽しみにしている。

1年前には思いもつかなかったスピードで、非接触ツールが活用され、オンラインによって物理的距離に縛られない関係性が広がっている。この先新型コロナウイルス感染症が収束するとしても、以前と全く同じ社会や生活に戻るとは思えない。また、今回の経験を経て、これまでの横並びの成功モデル（経済が発展し、いい学校からいい会社に就職し結婚、家と車を購入する）だけが正義ではなく、幸せの形や生き方は人それぞれなのだと気づいてしまった。

先が見通せないからこそ不安がるのではなく、自分にとっての正解を選んで行動する、私は、そんな「ユニーク（＝自分軸）」な大人でありたい。

* NHK スペシャル「三島由紀夫 50 年目の“青年論”」
2020 年 11 月放送

余談…

自粛生活中的の私の楽しみは、①頻繁に買い物に行けないので、家にある食材を上手に使い切りながら、自分が美味しい！と思えるものを料理し、ゆっくりと味わう時間を持つこと。生物として、物を食べて栄養を摂取することは不可欠な行為である以上、それを楽しみにできることは幸せだと感じた。②照明を落とした湯船につかって、アロマオイル

（カラマツ）を嗅ぎながらゆっくりと温まること。ユニットバスでもどこか旅館の檜風呂気分でリラックスし、心までほっこりできる。

制約が多い状況でも、その中で楽しみを見つけられることはしみじみ大切だと感じた。もちろん、料理し、味わえる、健康な身体であること、安心して暮らせる自分のスペースや当面のお金があることに心から感謝しつつ。

（境 磯乃）



▲ 憲法学者・齊藤笑美子先生をお迎えして（木曜研究会、2011.10）

Book club

『カフェーパウリスタ物語』と、伊藤野枝の伝記を読んで感じた事考えた事

○カフェーパウリスタ

銀座にある1911年創業の「カフェーパウリスタ」は「日本で最初の喫茶店」と言われる。私は、そこで『カフェーパウリスタ物語』の本を手に入れた。著者は、大正時代に日本初のフェミニスト集団として知られる青鞥社の女性たちが常連客だったことを誇りに思っているようだ。今私の知っているこの店は何の変哲もない珈琲店だが、そこに、平塚雷鳥や伊藤野枝が通っていたという。私もその仲間になったような気がして、興味がわき、関連する何冊かの本を読んだ。そして伊藤野枝の生き様に夢中になった。

○ 伊藤野枝の生き方

私が青鞥社の女性たちの中で伊藤野枝に特に興味を持ったのは、彼女の生まれや育ちが決して恵まれていた訳ではなく、貧乏だったにもかかわらず、自分の好きなように生き、強く自己主張したからだ。

1895 年 1 月 21 日福岡市今宿で伊藤野枝は生まれた。生家は極貧状態だった為、尋常小学校の時に 2 回里子に出されている。その後野枝は叔父に援助を頼み上京し、上野女学校に編入した。ここで辻潤と出会い、辻のくれた「青鞥」を読んで共感し手紙を書き、その後に青鞥社を訪れている。雷鳥は「生命力のあふれるこの少女が自分の言いたいことを筋道を立てていう態度には情熱的な魅力が感じられる～勇敢に因習に立ち向かう野枝さんを、青鞥社が何らかの力になるべき」と印象を語っている。野枝は女学校在学中に親戚の世話で末松福太郎と仮祝言を上げるが、卒業と同時に婚家に入るもすぐ家出した。

1912 年野枝 17 歳の時、雷鳥から旅費の援助を受けて上京し、すぐに青鞥社に入社した。わずか入社後一ヵ月で、雑誌「青鞥」に野枝の作品も掲載された。辻潤とは、入社と同時に同棲を始めるが、このことが原因で辻は失職することになる。

1913 年（18 歳）末松との離婚が成立し、木村莊太からの野枝宛のラブレターに野枝は動揺し手紙のやり取りをする。この関係はすぐ終わるが、木村と野枝はそれぞれこの恋を題材に小説を書き、このスキャンダルで野枝は有名になる。そして三か月後の 9 月長男の一（まこと）を出産した。出産後は辻潤と姑から「ちゃんと子供の面倒を見る」となじられることもしばしばあったが、一を背負って青鞥社に出勤した。

その頃から『青鞥』にエマ・ゴールドマンの翻訳を掲載する。さらに 1914 年 3 月（19 歳）には、エマ・ゴールドマンのいくつかの翻訳をまとめた「婦人解放の悲劇」を刊行した。

1915 年 1 月（20 歳）、野枝は『青鞥』の発行人となる。野枝は青鞥社の方針を「無規則、無方針、無主張、無主義」とした。その後「貞操論争」「堕胎論争」「娼娼論争」等が誌面で繰り広げられる。この中での野枝の発言内容は興味深い。同年 7 月野枝と辻潤は婚姻届けを出して、11 月今宿で流二を出産する。

しかし翌 16 年 4 月（21 歳）、野枝は、一（まこと）を辻のところに残して別れてしまう。野枝は乳飲み子の流二を連れて千葉に行き、宿の主人が見かねて世話をしてくれた地元の漁師の家に流二を養子に出す。

その後大杉栄と同棲を始めた野枝は 1917 年（22 歳）に長女魔子を出産する。野枝と大杉は 5 人の子どもを設けたが、大杉は魔子以外の子どもに革命家や無政府主義者にちなんだ名前をつけた。19 年（23 歳）に誕生した次女エマは大杉の妹松枝の養子になるが、21 年（25 歳）に出産した 3 女にもエマ（エマ・ゴールドマンから）と名づけた。翌 22 年（26 歳）

4 女ルイズ（ルイズ・ミッシェルから）、さらに 23 年（27 歳）長男ネストル（ネストル・マフノから）が誕生した。

野枝は、関東大震災後の混乱の最中に大杉栄と共に官憲の手で殺された（享年 28 歳）。それまでの 11 年間で、7 人の子どもを出産し、二人の子どもを養子に出した。いつも妊娠中か乳飲み子を抱えていた。ルイズを妊娠中の 22 年 11 月に泊まり込みでストライキ中の女工の取材をして、12 月に出産するなど凄まじい。殺されたのも、8 月にネストルを産んですぐの 9 月 16 日だった。

なぜ彼女は子どもをそんなに産み続けられたのか。なぜ子どもたちを死なせないですんだのか不思議だ。当時、妊産婦の死亡率は非常に高かった。不衛生な環境の上に、感染症の治療法がなかったためと聞く。避妊法も普及せず、また避妊自体が禁止されていた時代でもあった。野枝は、「自分は産みたい！」との強い意志で産んだに違いない。

○ 野枝を支えた「組合」

ある時、野枝は仲間達に「私の生まれた村では、古くから組合があった。困った時は助け合う。町の端っから 10 軒か 15 軒くらいに区切られ一つの組合が構成されていて、必要のないときは全く解体している。葬式でも出産でも夫婦喧嘩でも必ず組合が助けてくれる。」「私はあの組合を再現したいのかもしれない。この国のいたるところで」「政府も警察も必要ない」と語っていた。

野枝は組合が、村八分になっている人や被差別部落、障碍者を排除している事を問題にした小説も書いている。出産や病気など、何かあれば周りの人が何とかしてくれた。国は何もしてくれない。「国家など必要ない」と野枝は言う。この野枝の感覚を「天然の思想だ。頭で描いた主義主張とは縁のないところで、ただ、必要のために生じてきた一つの真理、小さな村の共同体で育った彼女こそはある意味、社会主義の在り様を、同志の誰より正確に、体で知っているのかもしれない」と村上由佳は『風よ 嵐よ』で書いている。

また「いわゆる『文化の^{おんく}恩沢』を十分に受けることのできない地方に、私は、権力も、支配も命令もない、ただ人々の必要とする相互扶助の精神と、真の自由合意による社会生活を見た」と『村に火を付け白痴になれ』で栗原康は書いている。「文化の恩沢」とは私は「明治以降の近代文明から受ける利益のこと」と理解するが、それが相互扶助や共働を壊していったと思う。

野枝は、結婚相手は勝手に大人たちの間で決めていたではないかと、激しく抵抗し逃げ出したのだ。「国家なんて、関係ない」と主張し続けてきて、生活や子育てを皆に助けられる一方で、逆に困っている人にはたとえ自分が貧乏でも手を貸して来た。まさに、「組合」という村の文化を体現

してきたともいえる。

○ 雷鳥が語る野枝の姿

野枝は、自分の子どもを青鞥事務所におぶって連れていき、おむつについたうんちを庭に捨て、汚れたおむつをそのまま子どもにはかせていた。青鞥事務所はうんち臭くなったとか、子どもを他の人たちが可愛がってくれる間に、原稿を書いていたとのことだ。こうした野枝の姿に私は憧れる。

雷鳥と、その夫となる奥村博史が共同生活を始めた頃、野枝が炊事を引き受けた事がある。辻と野枝の家には全く炊事道具がなく、野枝の作った調理に使う鍋はおむつを洗っていた金盥だったり、鏡を裏返してまな板がわりに使ったり、茶碗などもないので、1 枚の大皿にお菜とごはんを盛り付けた。雷鳥によれば野枝の料理は「仕事は手早いかわりに、汚いことも、まずいことも平気だった」そうだ。

また、雷鳥は、大杉と一緒に野枝が一張羅の羽織を着て訪れた時の姿を「どこかの旦那とお茶屋の女中といった感じ」と厳しい。野枝の因習に立ち向かう姿に感動し、助けてきた雷鳥も、日常の生活感覚ではなかなか受け入れがたかったようで、それはなぜか。雷鳥は「文化の恩沢」を受ける中に育ってきた。野枝はそれを受けることのない村の中で相互扶助を当たり前のこととして体感してきた。それが野枝の生活感覚だ。

○ 野枝の生き方から現代の幼児放置を考える

私は以前はそれほどでもなかったが、今は野枝の常識を超えた姿がとっても好きだ。福祉現場で働いた時に会った人々の姿を思い出す。窮地に陥れられた女性の中には、出身階層に関係なく、野枝のように常識を超えた行動をする人が結構いた。日常の生活習慣の違いに驚かされる事は沢山あったが、それ以上に、困難から逃げてきた人たちが、よくここまで人を助けられると思えるような振舞いもあった。

50 年も前に「個人的な事は政治的である」とウーマンリブは主張していた。個人的な事は、今日「自己責任」という言葉で片付けられる。昨年も子どもを虐待した事件が新聞を賑わせた。私が特に気になったのは母子家庭の母親が幼児を放置した事件だ。野枝とこの母親の違いを考えると、この母親は助けを求められなかったが、野枝は当たり前のように助けを求めている。野枝の社会観は相互扶助が当たり前だったからだ。声を上げられないのは、いわゆる「文化の恩沢」が人々から相互扶助や共働を奪ってしまったためなのではないか。コロナ禍において、生産性や貨幣だけでは「生活」できない、生きていけない事が多少ともわかってきたと私は思いたい。だからこれからは誰もが「これは

社会の問題だ」と声を上げられる社会にしていきたい。

野枝は、自分が産んだ子どもを一人も殺さないですんだ。何時も貧乏で居候もいたが助け合ってきた。困った時は田舎の親戚や近所の人たちも助けてくれた。でも最後に虐殺されてしまった。現代は法治国家なのに法を犯してなくても、世間からの道徳を口実にした攻撃は激しく、特定の正義感に押しつぶされることもある。こんな時代だからこそ「自分の生き方は自分が決める」という野枝の姿は魅力的だ。私は『カフェーパウリスタ 物語』との出会いがきっかけで、野枝の生き様にふれることができた。時間に追われていた時に読めなかったが、手元に置いていて忘れていた本も読むことができて本当に良かったと思う。

(石田 由美子)

(参考)○長谷川泰三著「カフェーパウリスタ物語」 ○瀬戸内寂聴著「美は乱調にあり」「諧調は偽りなり」 ○「平塚らいてう自伝 原始女性は太陽であった」 ○栗原康著「村に火をつけ白痴になれー伊藤野枝伝」 ○岩崎呉夫著「炎の女伊藤野枝伝」 ○村山由佳著「風よ 嵐よ」 ○大杉豊編著「日録・大杉栄伝」

Book club

「私が出会った 女性・ジェンダー」

G F 読書会にお誘いいただき、長続きしませんでした、一人では読めないであろう「第 2 の性」、「原始女性は太陽であった」を皆さんと一緒に読めたことは大きな喜びでした。

私は 1979 年に和光大学人間関係学科に入学しましたが、不屈き者の極みで、在学中には女性学に足が向きませんでした。私は、家庭でも、学校でもあまり「女」を意識することなく生きてきたように思います。ですから、知識としては女性差別を知っていましたが、あまり実感が持てなかったのだと思います。

コロナ自粛という思いがけない時間を得て、私が出会った女、男、ジェンダーについて振り返ってみることにしました。どうか笑ってお付き合い下さい。

私は、世田谷区の公立小学校で過ごしましたが、3 年か 4 年生の時に担任だった伴先生は毎日、石井桃子の「のんちゃん雲に乗る」を読んでくれて、私はそれがとても楽しみで

した。伴先生にはみどりちゃんという女の子がいましたが、その後、産休を取り、男の子を産みました。我が家は学校から 5 分くらいの至近距離にあり、詳しい経緯は知りませんが、しばらく、母が伴先生の生まれたばかりの男の赤ちゃんを預かっていました。私が学校から帰ると、縁側に赤ちゃんがいて、夕方、伴先生が来て赤ちゃんを引き取って帰っていきました。妹によると保育園児だったみどりちゃんも預かっていたことがあったようです。当時は保育園は少なかったでしょうし、生まれてすぐの赤ちゃんを預かる保育園もなかったのでしょう。それでも、いろいろと工夫して教員として働いていた伴先生は私が出会った「働く女」第一号だったのかもしれない。

その後、和光学園の中学校、高校で過ごしました。この学校は女も男もない感じで、「家庭科」という授業はなく、「生活科」というのがあって、社会通念的な男女の役割分担について話し合ったりしました。

このころ、文化人類学者の中根千枝さんの本をたまたま読んで、面倒くさくてどうも好きになれない生理というものを抱えながら、たった一人で男の案内人を連れて見知らぬ奥地へ向かう中根千枝さんはかっこいい！と思いました。

大学生の時に、中根千枝さんには遠くおよびませんが、自分も知らないところへ行ってみたいと思い、夏休みに大学のアルバイト掲示板で見つけた、長野県の高原レタスの栽培農家で住み込みのアルバイトをしました。高原列車として歌にも歌われた小海線の清里の隣駅から車で行ったところにある川上村でまるまる一か月レタス畑とハケ岳を見て暮らしました。集荷が正午のレタスは、朝真っ暗なうちから畑に出て収穫作業をします。親指くらいある大きな青虫には息を飲み、畑の溝を目にも止まらぬ速さで走る大きなネズミに驚きました。私が知っていた「町のねずみと田舎のねずみ」とか「ピーターラビットのお話」に出てくるかわいいねずみではありませんでした。畑作業では女も男も一緒に同じように働き、男の仕事、女の仕事といったものはないように感じました。違いがあるとすればだいたいレタスを取り終えて段ボール箱をトラックに積み込む段になると、お母さんはお昼の支度をしに一足先に家へ帰ることくらいでした。

朝暗いうちから畑作業をしていると、一足早く家へ帰れるのは嬉しいことに思え、なんで女がご飯の支度をするのか？という疑問や議論は空しく感じました。この村では軽い障がいを持って生まれた人もごく普通に受け入れられて、畑仕事をはじめ、自分のできる仕事を自信を持ってやっていました。雨が降って午後の畑作業ができない時など、私は少しお兄さんの彼と一緒にダンボール箱を組み立てて底

を止める作業をしました。お兄さんはなかなか私の名前が覚えられなくて、会うたびに「なんて名前だい？」と聞いてから作業を始めるのでした。誰も障がいのある彼のことを特別扱いしないで見ず知らずの東京から来た学生アルバイトと一緒に働かせること、女も男も農作業では同等、この村は、そして農作業は人間に優しいと思いました。

大学時代に出会った他大学の学生の中には、女が大学、まして大学院へ進学するなんてとんでもないという家族の反対を押し切ってきた人がいました。女子大学の授業では、「最高学府に学ぶ女性として」を枕言葉のように言う男の先生がいて、女性差別を肌で感じました。

卒業後は、和光大学図書館の非常勤職員の話が舞い込んできて、本は好きだし、図書館司書の資格も活かせる、ラッキー！ということで、図書館で働くことにしました。新しい職場は、男女の賃金差はなく、育児休業、育児のための時短勤務なども認められていて、(育児保障のための労働組合の戦いの成果です) たくさんの女性職員が元気に働いていました。それでも、「どうして子どもが熱を出すと、保育園は母親の職場に電話をかけてくるのか!」と怒りながら、早引きしていく人。パートナーの親族から、生活に困るわけでもないのに幼い子どもを保育園に預けて妻が働くことをなかなか認めてもらえないと話す人も。図書館業務の実際はもちろん、働く女性のいろいろな思いを、目の当たりにし、考えさせられた日々でした。そして、自分自身は、結婚しただけでは仕事を辞める理由にはなりませんでしたが、子どもができた時には、仕事と子育てを一度にこなせるほど器用ではないしいくら給料があっても、時間も気持ちもギリギリの生活をしなければならなくなるのは一時的とはいえ、いやだな。働かざるを得ないなら別だが…と思って、非常勤であったこともあり、あっさりと仕事は辞めました。

子育ては、初めての体験だし、それなりにたいへんでしたが、夫の協力もあり、なんとか乗り切りました。子どもが赤ちゃんの頃には子どもが寝入るのを待って、速攻で近くのスーパーに買い物に行き、必要なものはもちろん可能な限り買いたいものを買ひ、子どもが目を覚ます前に戻ることに命をかけていました。満足な買い物をしてドアを開けてこどもがまだ寝ていることを確認した時にはちょっとした達成感さえ感じていました。

二人目が生まれて、下の子が熱をだした時、夫が上の子を予防接種に連れて行ってくれたことがあるのですが、対応したお医者さんは、「なんでお母さんが連れてこないの?!」と夫に文句を言ったそうです。

子どもの幼稚園、学校では、実にいろいろな女性、男性

に出会いました。正規の職員として働く母、家事や子ども関係の用事と両立するようにバランスを取ってアルバイトをしている母、母が外で正規職員として働き、父は自宅で働き、父が主に子どもの世話とPTAの分担を引きうけているご夫婦。この私学に子どもを通わせたいのは自分だからと、義務教育の9年間、二人の子供の学費を自分で働いて捻出し続けた愛すべきツワモノ母！PTA役員になって、役員会で他の母たちに、離婚後、子どもがリストカットを繰り返しているという悩みを相談する機会を得た父も。

PTAの小さな役員会で、ちょっとした流れで自分の共働き経験を赤裸々に語ってしまった高校の英語の先生はとても面白かったです。なんで男の自分が台所の雑巾がけしているのか？と情けなかった結婚当初。早く帰宅したほうが夕食当番となるので、用もないのに、遅くまで職員室で過ごしていたとか。

子どもが高校生の時、キャミソールが大流行したことがありました。自由で制服のない学校だったので、多くの女子生徒は、思い思いのキャミソールを身に着けて闊歩し、その肩を出した姿がきらきらとまぶしく見えたものです。ところが、学校にキャミソールはいかがなものかという話

が男の教師から出ました。肌を出した女子生徒を見るとドキドキして困ってしまうというのです。キャミソールの女子生徒と隣合わせて座っている男子生徒は慣れてしまっていて、なんとも感じていないというのに。選択授業も多く、クラブをはじめ生徒会活動も生徒の自主性に任せている自由な学校なので、女子生徒の服装に関わる話がでたことに驚きました。キャミソールは学校にふさわしくないという話は、その後は立ち消えとなりましたが、女が装うこと、着たいものを着ることについて、話合ってみたら面白かったでしょう。

また、高校生3年生で妊娠した子がいました。彼女はなんとか卒業したいと先生たちと話し合い、先生たちも彼女の意思を尊重し、クラスでも話し合わせ、可能な限り授業に参加するということになりました。そして夏休みに出産し、卒業式にはベビーカーの赤ちゃんを連れて出席しました。もちろん彼女がいろいろと悩み、考えたことは容易に想像できます。だから先生たちは彼女の意思を尊重しようとしたのでしょう。私は彼女の勇気を応援したかったですが、退学を口にする親もいたそうです。なぜ妊娠したら退学なのか？これも話合ってみたかったです。

今、私は幼稚園でアルバイトをしています、この世に生を受けてからわずか3年くらいのこどもと対応していると、女子よりも男子のほうがはるかに繊細なことに気が付きます。体や洋服、靴が濡れて気持ち悪いとご機嫌斜めに

なるのはたいてい男子です。女子は「びしょびしょになった」と、けろっとしています。本来繊細な男子なのに大人になったら、24時間働く戦士?!幼稚園児の家庭では、父親が子どものお弁当(ほぼ毎日)を作ったり、朝、出勤の前に子どもを幼稚園や通園バスのバス停に送ってくることはわりと普通です。子どもの話から家事を分担している父親の姿も見えてきます。今まで女、母の仕事だった家事を男が本気(洗濯なら、干して取り込みたたむまで、食事作りなら、材料の購入から片付けまで)でやってみるというのは男、女、それぞれがお互いの「差別」「不自由」に気づくきっかけになるのではないかと思います。

（柳沢 泰子）

Book club

テレビドラマ『ハケンの品格』にみる派遣労働者の「雇用安定」の要件

はじめに ―「スーパーハケン」から派遣労働を考える視点

あの「スーパーハケン」が帰ってくる。そんな期待の下に、13年振りにテレビドラマ『ハケンの品格』続編が放送された。本稿では、この人気番組における派遣労働者の雇用の安定を考えてみたい。

現実社会では、2020年春以降コロナ禍の経済状況悪化によって、少なからぬ数の派遣労働者が失職している。2015年の法改正以降派遣労働の「雇用安定」が目指されているが、厚生労働省の要請にも関わらず、「無期雇用派遣」を派遣元企業が解雇するなど、「雇用安定措置」は十分に機能していない。派遣労働者に被雇用の状態を維持する「雇用安定」を保障できるかは、政治的な課題といえる。

派遣労働者の「雇用安定」が社会問題化する前後の時期に放送されたのがこの番組である。番組は、多彩な資格をもつ派遣労働者・大前春子が、スキルを駆使して他の派遣労働者や派遣先企業の危機を救うコメディタッチのドラマである。残業や休日出勤、および契約延長は一切しないという通常ありえない条件を掲げて、大前は無表情かつぶっきらぼうな口調ながら鮮やかに仕事をこなす。「働くことは生きること」を決め台詞とする大前は、破格の高時給を得る「特Aランク」の「スーパーハケン」と呼ばれる。

2007年放送の初編は、平均視聴率20%を越え(ビデオリサーチ)、大前の「スーパー」ぶりは当時大きな話題になった。

またギャラクシー賞や橋田賞、放送文化基金賞を受賞するなど、脚本が高く評価された番組である。脚本家の中園ミホは、不本意ながらも「長いものに巻かれて」働かざるを得ない派遣労働者の女性たちにせめてドラマで「スカッとしてほしかった」と語っている(「朝日新聞」2020年10月16日付朝刊)。その言葉通り、番組は派遣労働者のなかでも〈女性〉の直面する不条理な問題点を次々と可視化し、「スーパーハケン」・大前が課題解決を導く展開である。番組が視聴者に支持された理由の1つは、派遣労働という働き方の問題を「女の問題」として取り上げた点にあると推察できる。そのような派遣労働女性にエールを送る番組の「雇用安定」問題への向き合い方を考えたい。

なお初編の放送期間は2007年1月から3月まで、続編は2020年6月から8月までで、いずれも日本テレビ局の午後10時「水曜ドラマ」枠の放送である。

1. 対立しながらの共存 ―「雇用安定」を獲得する並外れたスキル

そもそもなぜ大前が派遣労働を選択したのかの詳細は謎とされる。かつて正社員ながら、経営破綻による人員整理で失職したらしいという経歴のみ明らかにされている。正社員ですら簡単に解雇されるという経験が、大前に「雇用安定」を切実な課題にさせたとしても不思議ではない。

大前の派遣先企業は、オフィス街にある大手食品総合商社である。初回冒頭のナレーションは「いまやハケンなしに企業は回らない」といい、画像は主な登場人物の年齢と役職、年収を字幕で明示する。ここから派遣労働者は派遣先企業にとって重要な労働者である一方で、賃金体系と役職の点で社内でのヒエラルキーの最下位であることがみえてくる。社内構造のみならず、派遣労働者は、派遣労働者を同僚とみなさない正社員の差別的なまなざしにも耐えている。不本意ながら「長いもの」に巻かれざるを得ないのは、契約更改という「雇用安定」を脅かす仕組みのためである。

一方の大前は常に正社員を敵視し、正社員の理不尽な要求や批判的なまなざしを跳ね返す。自ら「契約延長なし」と言い切る大前には契約更改なしの脅しは切り札とならないのである。大前は、雑談する正社員に「給料泥棒」と手厳しく非難する。それができるのは大前が「特Aランク」に見合った仕事をしている自負ゆえであろう。大前の言動に感情的に反発するも、正社員は、案件が的確に進行されていくゆえに、大前のスキルを認めざるを得ない。

正社員と対立しながらも共存して、派遣労働者の「雇用安定」を可能にするのは、派遣先企業にとって大いに役立つ「スーパー」に高いスキルであった。

2. 派遣労働の問い返し ―「スーパー」ではない派遣労働者の「雇用安定」

「スーパー」ではない派遣労働者の「雇用安定」はどうか。大前を慕う3人のシングル若年女性派遣労働者によって、番組における一般的な派遣労働者の「雇用安定」を検討する。

初編の森美雪は、学校卒業時の就職活動で内定を得られず、しぶしぶ派遣会社に登録するが、仕事上の武器になる資格もスキルもない。スキルを偽って採用にこぎつけた派遣先企業の仕事では失敗が続き、契約更改は危機的であった。とはいえ発案した企画の成功と職場の良好な人間関係から、森の目標は、紹介派遣試験に合格して派遣先企業の正社員になることに変わった。

続編の福岡亜紀と千葉小夏は、どちらも「雇用安定」を望んでいた。福岡は、年齢的に派遣労働者として仕事があるか不安を抱え、契約更改したいために上司のセクシュアル・ハラスメントや理不尽な指示を我慢して受け入れていた。新卒の千葉は、就職活動に失敗したために仕方なく派遣労働を選択した。派遣先企業は新卒採用試験で不合格になった企業である。縁故採用の新卒社員に対抗心を抱き、企画・立案に携わり周囲に自分の力量を認めさせようとする。最終話で2人はそれまでの仕事ぶりが認められ、派遣先企業の上司の起業によって、ラッキーにも正社員に登用される。しかも新たな職場は、大前に感化されて正社員中心の組織に疑問をもった上司が、職場内のフラットな人間関係を重視し、柔軟な就労形態を採用する企業であった。

3人にとって、派遣労働は積極的に選択した働き方ではなかった。それでも仕事を続けたい3人は、たとえ派遣労働者であっても、大前のようになれば、「雇用安定」を得られるのかと一旦夢見る。しかし当然ながら、「スーパー」になるのは不可能であることを悟る。「スーパーハケン」というキャラクター設定は、「スーパー」ではない派遣労働者の雇用の不安定さを浮き立たせる仕掛けでもある。結論として見たのは、「スーパー」ではない派遣労働者は、派遣労働者のままでは「雇用安定」を得られないということであった。

3. 補強する仲間 ―「雇用安定」に役立つ職人ネットワーク

大前のもつスキルに、漁船操縦やマグロ解体、左官などがある。これらのスキルを持つ者の屈強なイメージと華奢な身体の大前とのギャップには、意外さを演出する面白さがある。しかしながら筆者はコメディ的要素のみならず、これらのスキルが熟練した職人のスキルである点に着目して、「雇用安定」に役立つものを考えていく。

派遣先企業の危機を救うために、大前はしばしば、元の

親方や、修業時代に知り合ったのであろうか、職人に応援を求める。すると、みな快く、恐らく無償でスキルを提供するのである。例えば、続編終盤、大前の関わる企画の内覧会前夜に失火で仮設店舗が使えなくなる場面がある。その時に貢献したのが、大前の声掛けで集まった左官である。左官が協力して易々と店舗を補修するのがきっかけとなり、士気を取り戻した社員はできる準備を始めるようになる。また作業の合間に左官と談笑する大前の表情は、派遣先企業では決して見せないリラックスした表情である。企画お蔵入りの難局を救ったのは大前の信頼する熟練職人のスキルと職人のネットワークであった。

「雇用安定」の視点からいうならば、職人が救ったのは、大前個人ではなく大前の派遣先企業である点が重要である。「スーパーハケン」といえども、派遣先企業がなくなれば、「雇用安定」は難しい。派遣先企業の存続に関わる危機を救った大前の職人ネットワークは、大前の「雇用安定」の維持を間接的に支援したといえる。

大前の「雇用安定」は「スーパー」なスキルという個人的なもののみによって実現しているのではない。弱い紐帯ながら、困ったときに助けてくれる職人ネットワークこそが、大前の「雇用安定」を補強するための重要な役割を担っていた。

おわりにー「スーパーハケン」から読み取る「雇用安定」の要件

派遣労働の雇用の不安定さが社会問題化して久しい。それゆえに「働くことは生きること」の台詞は、派遣労働者の大前が言うところに意義がある。言葉が派遣労働者の雇用の不安定さと世間の差別的なまなざしへの怒りの意味を帯びるからである。

雇用の不安定さに抗するために、大前の高いスキルを用いる戦略は常套手段であるが、「スーパー」ではない派遣労働者には哀愁を感じさせるばかりであった。さらに 3 人の派遣労働者の転職先の高待遇は、転じて、派遣労働者の不安定雇用の背景にある「企業中心社会」という社会的な問題をあぶりだした。また大前を案じるある正社員の台詞は、派遣労働者の社会保障の手薄さという問題にも言及している。そんな不条理ばかりが見えるなかで、派遣労働者・大前の行動から読み取れたのは、職人的スキルが直接的・間接的に「雇用安定」を補強して役立つ可能性であった。

契約終了後の大前は、遊牧民家族に溶け込んで楽しそうに暮らす。カレンダーに印をつけるほどに心待ちにしている生活である。大前が軸足を置くのは、自分の習得した知識や熟練したスキルに依って暮らしていける職人社会なの

である。

「スーパーハケン」という荒唐無稽な物語を派遣労働者の「雇用安定」に着目してみると、「企業中心社会」という長大な壁に地道に挑む物語でもあった。大前の示した突破口の 1 つは、雇用の空白期間を恐れない、断続的な働き方を可能にする企業論理の転換であった。2 つめは、職人的スキルに可能性をみて、断絶して捉えられがちな職人社会と企業社会の接合し直しである。このように番組内の「雇用安定」獲得の方策には、働き方の発想の転換を求める 2 つの要件が見て取れた。

(津田 好子・本学非常勤講師)



▲「日本のフェミニズムの歴史」(2018 後期)

ダイアナという名の少女

2020 年度春 semester の大学院ゼミで、平林美都子著『女同士の絆——レズビアン文学の行方』(彩流社、2020)を輪読した。この本のテーマは、19 世紀から 21 世紀初頭までの英米カナダ文学作品における「レズビアン」的な表象を読み解いていく、というもので、英語圏の文学に疎い私には、正直なところ、いまひとつ内容が頭に入って来なかった。

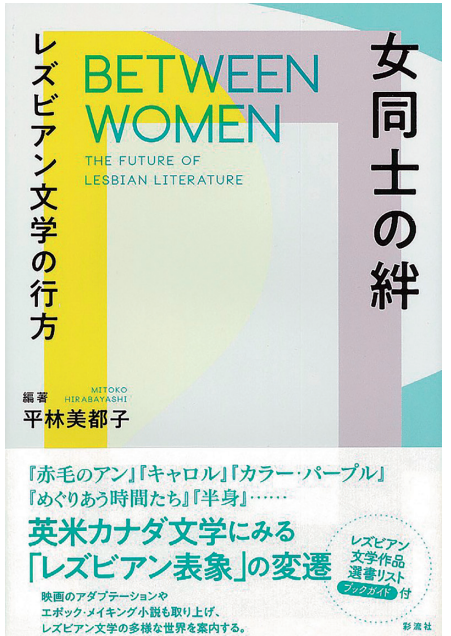
そんな中で、L・M・モンゴメリの『赤毛のアン』を扱った第 2 章「女同士の友情——性を仮装／仮想する」は面白く読めた。言わずもがなだが、取り上げられる作品についてある程度知っていたほうが、この本を深く味わえる。

第 2 章が記述するのは、アンと、アンの親友のダイアナ、アンを養子として迎えるマリラとマッシュウの異質性と周縁性。それから、アンがギルバートと和解して結婚するという異性愛プロットが唐突に完成する前の、ダイアナとアン、マリラとアンの女同士の「友情」である。実は、ダイアナは、アンに対してかなり率直な愛情表現——「告白」——をし続けている。それがアンの空想世界に回収されて、「ごっこ遊び」として無害化されている。このような分析にふれてようやく気付いたのだが、ふたりの関係に執着していたのは、アンではなくダイアナ。ダイアナこそが現実世界でアンを愛していたのである。

この章を読み、小学生のときにテレビアニメ『赤毛のアン』(1979) が好きだったことを思い出した。それに、たしか大学 1 年生か 2 年生の春の季節に、日本語訳のシリーズを一気読みしている。そして、私はこれまで、薄幸のアン、変わり者のアンのほうが、裕福で綺麗なダイアナにあこがれ、ふたりの関係に執着していたと思っていた。

慣れないオンライン授業の準備に追われた学期が終わる頃、Netflix で配信されている『アンという名の少女』を晩酌のお供に見始めた。カナダ CBC と Netflix により共同製作された実写版である。今度は、ダイアナのアンに対する熱い思いを、アンの空想に埋めることなく受け取った。ギルバートの求愛に応じるアンと、キュービット役を果たすダイアナを描いた最終回に至っては、3 シーズン 27 エピソードに通底するテーマが、ダイアナの失恋であったかのように感じた。不憫なダイアナに泣いた。

(杉浦 郁子・現代人間学部現代社会学科)



▲『女同士の絆——レズビアン文学の行方』書影

教室のジェンダー論——ホモソーシャルから読む『氷壁』——

和光大学に着任して十年以上経った。お陰様で和光では、本来の専門である英文学という枠を超え、ジェンダー論なども織り込んで自由に授業をさせて頂いている。2～3 年前からは、「ホモソーシャル」のテーマをドラマや映画などに探るとというのが私のゼミの定番になってきた。その前は、学生たちが卒論のテーマとして持ってくるのは、圧倒的にアニメをジェンダー論から分析する、といったものが多かった。その殆どが、女性主人公の女性性の殻を破るとか自立の過程を辿る、といった、「女性」の立場からの分析であった。ところが「ホモソーシャル」のテーマとなると、男性側からの分析も欠かせない。そのせいか、この頃のゼミでは男子学生が少し増えてきて、かつ生き生きしているような気がしている。しかも「ホモソーシャル」のテーマは、ある意味、余りにも馴化されているがゆえに目立たない形で、多くの作品に浸透している。と言うより多くの日本人の意識にはびこっている。だから、それに光を当て可視化することは、ジェンダー差別の問題がいかに内面化されているかを炙り出すことになり、学生にとって良質な知的刺激となってい

るように感じる。そこでこの機会に、我がゼミでの成果を少しばかり紹介したい。

ホモソーシャルとは、英文学の泰斗、イヴ・コゾフスキ・セジウィックが提唱した概念であり、家父長制社会を支える男性間の絆を指す。セジウィックは、そのモデルをシェイクスピアに始まり 19 世紀に至る英文学作品の分析から抽出したが、発想を文化人類学の知見にも依拠していることからして、家父長制社会が成立した原始時代にまでその淵源を遡ることができると言ってよい。現代においてはそれほど典型的なパターンではないにせよ、根強くはびこっていることは学生たちが探し出してきた多くの作品からも明らかである。

この概念による分析が生きるのは、男性同士の関係性そのものよりも、そこに女性が介在する場合である。文化人類学者のレヴィ・ストロースは、未開民族の家父長制社会において、花嫁は男性集団から別の集団への贈与物として機能していると看破した。そしてそれは、二つのグループの男性間の絆を深めるためになされるのであるとも。さらにルネ・ジラルールは、三角関係の恋愛において、同じ女性を欲望する男性ライバル間の絆こそがその三角関係の要因であるとし、友人同士の二人が同じ女性を欲望するのは、ライバルである友人の欲望を模倣するせいであると分析した。欲望の対象である女性は「対象」=他者にすぎず、この三角関係において最も重要なのはライバル関係にある男性二人の絆である。争いの結果、ライバルを蹴落とした男性は、一旦女性を手に入れてしまうと、その女性への関心を失う。女性はあくまでも対象にすぎないからだ。セジウィックは先行するこうした知見を洗練させて、家父長制社会における男性間の絆をホモソーシャルと名付けた。これは、究極の女性蔑視と女性嫌悪の心理メカニズムであるが、こうした分析は、根深い女性への差別・嫌悪のはびこる理由を説明してくれてもいる。

この概念を理解した上で、ゼミでは映画『カサブランカ』（1942年、アメリカ）やテレビドラマの『北の国から・遺言』（2002年、フジテレビジョン）などを鑑賞し、ホモソーシャル作品の実例から学んだ。概念の説明だけでは理解できなかった学生たちも、作品で具体例を見るとよく納得できたようで、学生自らが新たな気づきを得て活発に議論も交わされた。ホモソーシャルの説明を聞いた学生たちは、子どもの頃好きで見ていたあのドラマがそうだった、と言い出し大いに納得する。一つの概念を学ぶことによって、それまで見えていなかったものが突如姿を現す。これこそ、学

びによる気づきの恰好の例である。

学生たちにはホモソーシャルが描かれている作品を自ら探してくるよう課題を出し、発表してもらう。これが教員にとってもなかなか面白く、自分のまったく知らない作品を学生たちから教えてもらえる機会となる。とくにホモソーシャルのテーマは、ウルトラマンとか戦隊ものの少年向けドラマや、任侠ものの映画などにとても多い。いずれも教員には疎い分野であるだけに、学生による紹介はとても有難い。

コロナ禍で、オンライン授業となった今年度は当初ビデオを見ることができなかったために、小説を選んだ。井上靖の『氷壁』（1963 年）である。以下で、この作品のホモソーシャルを授業とは別に、筆者の観点から読み解いてゆきたい。

主人公はそこそこ名の知られた青年登山家、魚津恭太と親友の小坂乙彦である。二人で冬の穂高岳、前穂の東壁に挑むが、絶壁を登頂中に小坂が滑落死した。じつは小坂は美貌の人妻矢代美那子への思慕の念を断ち切れず、その思いを抱えながらの登山だった。小坂を介して美那子に会ったことのある魚津は美那子の美貌に圧倒されていたが、小坂の死後、美那子から用事と称して連絡を受け合う機会が重なるにつれ益々惹かれてゆく。小坂の死の原因を、彼らが初めて採用したナイロン・ザイルの品質に帰す魚津の主張が新聞に掲載されると、面目を潰されたザイルの製造会社が怒り出し、ザイルの性能試験を実施することになった。奇しくもその試験を担当するのは美那子の夫であった。その再現実験でザイルは切れなかったが、その機縁がまた魚津と美那子の距離を縮めることになる。

小坂にはかおるという妹がいたが、彼女は魚津のことを慕っており秘かに彼との結婚に憧れていた。伝統的なホモソーシャルであれば、小坂の妹が親友の魚津に嫁いで男同士の絆を強める役割をするのが王道である。ところがこの作品にはもう一つの、そしてもっと重要なホモソーシャル関係があり、それが美那子をめぐる小坂と魚津の三角関係である。物語を駆動するのはこちらだ。恋の成就を望みまではしないものの、魚津の心は美那子にある。ところが二人の逢瀬の後、必ずと言っていいほど、かおるが二人のうちのどちらかの前に現れる。まるで死んだ小坂の代理が、魚津と美那子の関係が進展するのを妨害しているかのよう。このときのかおるは小坂の分身、あるいは小坂の幽霊のようでさえある。つまり、後者の三角関係は、小坂の死後においても成立しているのだが、一般的に、男同士の絆、ことにライバル同士の絆はとても強いので、一方の死後にまで三角関係が永続するのはよくあることである。

男としても通用する名を与えられたかおるは、敏捷そうなほっそりした姿からも少年のような印象を与える。残雪の中から発見された小坂の遺体は樅の木の焚火で焼かれたが、かおるは山男たちによる厳粛な葬儀の紅一点の参列者であった。彼女は、山男たちホモソーシャルリティに参入することを許された唯一の女性である。兄の遺体を焼く炎を見て感動し、彼女は魚津に自分と結婚してほしいと告げる。女性からの逆プロポーズ、これも当時の女性性を逸脱する振る舞いだ。魚津は美那子への想いを諦めざるをえないと観念し、かおるとの結婚を承諾する。だが彼は結婚する前に二人で穂高に行こうとかおるを誘う。穂高の難所に挑戦し違う人間になってから、かおると結婚するつもりだった。「違う人間になる」、とは、美那子を諦め忘れるという意味である。しかし魚津は遭難死する。美那子に呼び戻されるように感じる、それまで歩いて来た道を戻らず、美那子の幻影には抵抗し、かおるが待つ場所に向かって進んだ挙句、落石に遭ったのだ。かおるに向かって進む途中で、魚津は息絶えた。ここでかおるが死んだ小坂の代理として魚津を美那子から引き離し、死へ導いたという構造が明白に見てとれよう。

かおるは、女性ながらも兄の属する山男たちのホモソーシャルな社会の一員である。他方、美那子はその社会の外部にいる、近代の象徴である。彼女の夫は、当時始動し始めた日本の高度成長期産業社会の中枢に位置し、ザイルの再現実験に従事した科学者であり、近代経済と合理主義の象徴だ。本来伝統的でホモソーシャルな山男の社会の住人である魚津にとって、美那子は「他者」であり、欲望の対象であった。しかも彼女は、小坂と魚津をライバル同士として争わせ、二人の関係を不安定で剣呑なものにする。そうなる前に小坂が亡くなったから免れたものの、近代の象徴たる美那子は、素朴な山男たちによって維持される伝統的なホモソーシャル共同体の破壊者である。

そう考えると、美那子と魚津を奪い合ったかおるは、伝統的なホモソーシャル共同体の守護神であろう。しかし彼女は魚津を死の世界へ誘う死神のような存在でもあった。現に魚津の死さえ、彼女にはそれほど応えていない。自分に向かって来る途中で死んだ魚津は、永遠に自分に向かい続けているような気がする彼女は、魚津の死後充実感で満たされていた。ようやく魚津を美那子から完全に奪い独り占めできたのだ。そして彼女は、「美しいフェースを探し、そこへ小さなケルンを作って、その上に魚津恭太と小坂乙彦の二本のピッケルを差し込むために」穂高へもう一度登ろうとする。それは、兄たちが所属したホモソーシャル共同体の墓標を打ち立てる行為に他ならない。美那子という

近代の女を排除した彼女が純化し神聖化するホモソーシャル共同体は、彼女によって終焉を見届けられたるということであり、かおるはその神殿に仕える巫女である。

この小説が発表された 1963年当時、高度経済成長に突入する直前の日本で、瀕死の状態にあった伝統的なホモソーシャル共同体は、かおるという巫女によって永遠に美しいままの姿で穂高に埋葬された。他者たる女たちが容易には近づけない穂高の峻厳なる山中に。その後の産業社会を経てなお今も、もちろんホモソーシャルは形を変えてはびこり続ける。『氷壁』という作品は、作者、井上靖が、日本におけるホモソーシャル共同体の変遷の、ある一瞬を捉え表現した作品と言えるかもしれない。それは井上自身が帰属していたホモソーシャル共同体－戦場で散った兵士たちの一を支えた一つの時代の終わりであったろう。それ以降、彼は、そして彼らは、「他者」である女と本気で向き合わなければならなくなった。険しい山中に潜む「美しいフェース」はもう彼らのものではないのである。

（宮崎 かすみ・表現学部総合文化学科）



▲「氷壁」と関連する書籍、映像化作品のDVD

自著紹介 『越中おわら風の盆の空間誌 ——〈うたの町〉からみた近代』 ミネルヴァ書房、2019年、328＋v頁、定価5,500円＋税

毎年 9 月初めの三日三晩、八尾^{やうぎ}（富山市）はおわら一色に染め上がる。元禄時代に起源をさかのぼるとされる伝統行事「風の盆」である。

おわらとは富山一円に伝わる民謡で、八尾はその発祥の地にして本場である。風の盆の期間、主な舞台となる 11 ケ町の沿道には雪洞^{ほんほり}が並び、家々は門幕で飾られる。街路はおわらを奏で、歌い、踊り興じる人びと、そして見物人で埋め尽くされる。元来、雑多な芸能をとりまぜて行われていたらしい風の盆が現在のような形に整えられていくのは、明治 30 年代以降のこと。本書は北陸の小さな町・八尾がおわらの町＝〈うたの町〉として成立した過程や諸要素の力学を解き明かし、またそれにまつわる人びとがどのように近代を見、経験し、創造してきたのかを描いた学術書である。

「第 5 章〈新踊〉の創造——郷土芸術とジェンダー」では明示的にジェンダーの問題に取り組んだ。〈新踊〉とはおわら踊りの中でもおもに 10 代後半から 20 代後半の未婚者によって演じられ、女踊と男踊がある。女性はたおやかに、男性は力強く労働に励み…といった素朴な男女観が民俗芸能に残っているのかと思いきや、この踊りはじつは昭和初期に日本舞踊家・若柳吉三郎によって新しく振り付けられたものである。

昭和初期といえば、交通網の整備やメディアの発達、新中間層の台頭などを背景に、旅行の大衆化が一気に進んだ時期である。全国的に観光ブームといえるような現象が起こり、レコードや映画とタイアップしたご当地ソングも次々に発表された。東京の百貨店では地方物産展が人気を博し、おわら踊りの新作も日本橋三越本店での富山県特産陳列会の余興出演のために行われた。

この時、舞台で踊ったのは八尾芸者であった。素朴さが重視された郷土芸術ではあったが、「宣伝のため東京の舞台に出す」には演者は誰がふさわしいのか、どのような出し物を、どのような演出で供すればよいのかが慎重に検討された。そこで選ばれた踊り手が八尾芸者であり、新たな振付が生まれたのである。唄と伴奏はすでにセミプロのような形で吹込みや出演経験の豊富な地方衆^{じかた}（すべて男性）であった。若柳吉三郎は、高名な画家・小杉放庵の詠んだおわらの歌詞の情緒を重んじて、男女の情愛のこまやかさか

ら醸される、艶のある雰囲気振付や演出によって実現しようと奮闘した。

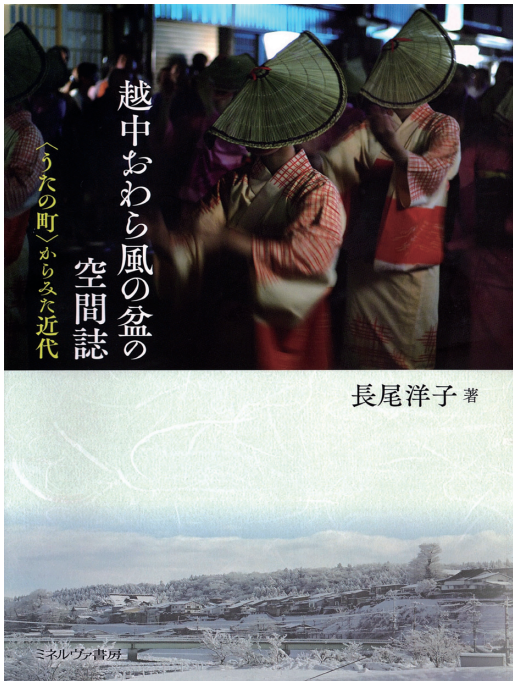
一般的に、郷土芸術や民俗芸能には野趣が求められるものである。芸者の芸は巧みさや俗気を感じさせ、野趣あるものとは受け取られないリスクもあった。それでも独特の町場の文化を築いてきた八尾固有の郷土芸術をどのように物産展の宣伝に活かせるのかが若柳吉三郎はじめ関係者の悩みどころであった。

こうした状況や関係者のジレンマは、ジェンダーの観点からどのように見えるだろうか。

男性（と彼らに同一化する大衆）に快楽を与え、男性にまなざされることによって成立する女性表象が宣伝に利用されていることに既視感と憤りを感じる向きも多いであろう。こうした宣伝を支える構造は、地方や郷土の商品化（観光ブームや地方物産展人気はその表れ）、人びとの嗜好や芸術観、地域振興の方向性などとも複雑に絡み合って近代という空間を編み上げてきた。さらに、富山県特産陳列会の余興としては演じられなかった男踊の位置づけと担い手、（野卑ではなく）野趣ある高尚なものとしてのおわらの振興、芸者の踊りが一般女性によって伝承されるようになったきっかけなども含めて検討すると、「青年」「少女」「見せる身体性」という問題系に突き当たる。

その先は拙書に譲るとして、あらためて表紙カバーを眺めていただきたい。若くて美しい女性表象の宣伝効果に便乗したわけではない。不鮮明な踊り姿に、かつての八尾芸者、おわらに関わった人びとが幻のように重なって見えはしないだろうか。それは〈うたの町〉から見た近代のスナップショットである。

（長尾 洋子・表現学部総合文化学科）



「巫女の職能と身分について」

2009 年に和光大学表現学部に入學した私は、所属していた研究室（山本ひろ子ゼミ）の「お向かいさん」であった柊光紘先生のご紹介により、数年間にわたり和光大学ジェンダーフリースペース（ジェンダーフォーラム）でアルバイトをさせて頂いた。ジェンダーをめぐる学問についてはいまだに不勉強なままだが、当時、井上輝子先生の主宰でボーヴォワール『第二の性』などの読書会が頻繁に催され、活発に意見を交わす声々が耳に残っている。以来、自分の研究する日本中世芸能史の視点からではあるが、巫女や女性の力について関心を持つようになった。今回、GFS の阿野さんから「ご自分の研究やお祭りのこと等々を自由に書いていただけたら」というお言葉を頂いたので、少し専門的にはなるが「巫女」をめぐる研究動向と課題についてご紹介させて頂きたい。

現在「巫女」というと、白衣に緋色の袴を履いた若い女性がイメージされることが多い。神社の社務所で受付やお守りの販売をし、神事の際に「浦安の舞」（昭和 15 年に作られた神楽舞）などを舞う。なぜ一般に若い女性が想起されるのかというと、巫女の就職条件としてほとんどの場合、十代から二十代前半までという制限が付けられており、その定年は二十代なかばから後半にかけてと非常に早いからだ。アニメ・漫画などにおける巫女の表象も、すべからく若い女性であり、巫女が存在がある意味で人々の愛玩と消費の対象になっていることは自明である。しかし近代以前の巫女は、その存在形態においても宗教実践の内実においても、もっと遥かに多様であった。神社に所属する巫女もいれば、市井のみで活動する巫女もいたが、どちらの巫女もほとんどの場合は生涯にわたる職であり、年齢制限はなかった。なかには宗教者の夫とともにキャラバンをなして集落を渡り歩き、祈禱を行うという形態もあり、現代の巫女イメージからはかなりかけ離れている。

巫女については文化論、特に民俗学（柳田國男、中山太郎など）において早くから論じられてきた。1990 年代以降の白眉は歴史学による巫女研究で、それまでとは違った角度から巫女の実像を照射した。身分の低い芸能者（宗教的芸能者）を扱う「身分的周縁論」の一環としての巫女研究で、神田より子*1、西田かほる*2、林淳*3らの研究が知られる。主として近世以降の資料に基づき、巫女の社会的な位置を、実態に沿って捉えようとしたものである。

近世における巫女の身分は、中世期と比べて衰退が目

付くが、地方によって一定の振れ幅が認められる。たとえば中部地方の巫女は、山伏や神事舞太夫の妻となることで辛うじて巫女職を維持することができたが、東北地方では巫女がみずからの檀那場を確保し、宗教者として経済的にも自立が可能だったという。そうした地域性もあって、現在でも東北地方では死者霊の声を聞く巫術「口寄せ」で有名な「イタコ」等、民間信仰の担い手として女性が活躍している。そのほかの地域でも、南西諸島をはじめ、長崎県の対馬、島根県の隠岐諸島、伊豆諸島の青ヶ島などの島々に民間信仰を担う巫女のすがたが認められる。さまざまな事例をもとにした巫女の総合的研究が俟たれる。

民間宗教者としての巫女に共通する役割は、「神懸かり」と「託宣」である。日本では記紀神話のアメノウズメ以来、神々のメッセージを人々に伝える憑依・託宣の担い手といえは女性（ないし童子）が主流とされ、その通念は近い頃までであった。男性が憑依する場合には「男巫女」「小男」（さお）などと例外的に呼ばれることが多い。

広島県の山間地には、神懸かりを含む神楽（備中荒神神楽、比婆荒神神楽など）が伝わるが、この神楽を舞うのはすべて男性である。ところが古文書を繙くと、もとは女性が神懸かりの主たる担い手だったことがわかる。中世末期から近世前期までの当地では神懸かり・託宣を行う神子が尊重されており、文書等にも「神子・法者」（法者は男性の宗教者）と男性宗教者よりも先に「神子」を記述する慣習があった。しかし時代を下るごとに神子の身分は零落し「法者・神子」と呼称の順番も入れ替わり、やがて民間宗教者としての神子職そのものが消滅してしまう*4。

近世を通じて巫女（の身分・職能・文化）が衰退していく傾向にあったのは、幕藩体制による宗教者支配が強く影響している。江戸幕府は宗教者・芸能者を本所へ所属させることで統括したが、巫女にはなぜか本所がなかった。そのため「本所を持たない神子は、みずからの宗教活動を幕府から保証されるために、みずからの夫や父、よりいえば男性の所属する宗教各派の編成を受けてゆくことになる」（西田かほる、注 2 前掲論文）。

また江戸時代は、本所として神道裁許状を発行していた吉田家による吉田神道（唯一神道）の影響が全国的に強くなった時代でもある。神仏混交で地域色も豊かだった宗教実践のかたちが、新たな教派により画一的に神道化されていく。そんななか、民間の巫女が担った神懸かりや死口（口寄せ）は、民間からの根強い信仰の希求に応える一方で、まさに神仏混交の怪しげな「外法」として神社神道から忌避・排除される運命にあった。明治 6 年の巫女禁断令（教部省「梓巫市子並憑祈禱孤下ヶ等ノ所業禁止ノ件」）によって、民間

習俗的な巫女の活動は全面的に禁止されることになる。

以上、民間宗教者としての巫女についてふれてきたが、今後は巫女が衰微する以前、中世における巫女のありようの解明が課題となるだろう。中世、諸国一宮クラスの大神社では巫女が高い地位を保持して祭祀集団を形成していた。彼女らは権威を持つだけでなく、祭礼や芸能にコミットして「巫女の文化」ともいうべき世界を創出し、自己を主張してやまなかった（一例として出雲・美保神社の青柴垣神事*5など）。

神社所属の巫女だけでなく、各地を渡り歩いた職能民（道の者）としての巫女・白拍子もまた、目立たないところで日本の文化形成に大きな役割を果たしている。たとえば平安時代末期（治承年間。1180 年前後）成立の『梁塵秘抄』に見える膨大な流行歌謡群（今様・神歌）は、白拍子（しらびょうし）という女性芸能者によって歌い舞われたことで有名だ（源義経の恋人・静御前や、『平家物語』に見える祇王御前・仏御前などが知られる）。今様・神歌はやがてすたれ、記録に現れなくなってしまうが、不思議なことに三百年近く経った天文年間（1532 年～1555 年）の伊勢外宮の神楽記録を見ると、伊勢では数多くの歌が歌い継がれていたことがわかる。このことは、ちょうど同じ頃まで「伊勢白拍子」なる集団（『年内神事次第旧記』などに見える）が各地で活動していたことに関わるのではないかと私は考えている。伊勢白拍子のような女性芸能者たちが、数百年にわたり今様・神歌を歌い継いでいなければ、伊勢の神楽に膨大な歌謡群が残されることはなかっただろう。

その伊勢神楽も現在では廃絶してしまったが、各地方の集落に伝わる神楽（北は青森県、南は宮崎県に至るまで）では、同じ系統の神歌が現在も歌い継がれている。現在ではその多くが男性を中心に継承されているにせよ、神楽の文化的基層を支えるのは中世の巫女たちの「声わざ」にならない。今様・神歌という豊穡なる声・ことばの世界を、800 年以上を経た現在に伝えることができたのも、「乱舞」を舞い「神歌」を歌い継いできた中世の巫女・白拍子たちの活動のたまものだったといえる。

「巫女」という存在やそのイメージが疑問もなく消費され続けている現在、埋もれてしまった巫女の実像とその文化を発掘し、この今に投げかけることが民俗学や日本文化論の持つ一つの使命といえるかもしれない。

（宮嶋 隆輔・日本中世芸能研究）

*1 神田より子『神子と修験の宗教民俗学的研究』（岩田書院、2001 年）ほか *2 西田かほる「神子」（『民間に生きる宗教者』吉川弘文館、2000 年） *3 林淳「梓神子と神事舞太夫」（『国立歴史民俗博物館研究報告』142、国立歴史民俗博物館、2008 年） *4 岩田勝『神楽源流考』（名著出版、1983 年） *5 山本ひろ子「一年神主と市殿 一美保関の神人たち」（別冊太陽『祭礼 神と人との饗宴』平凡社、2005 年）



▲ 米俵に座して神降ろしを行う巫女（隠岐島前神楽）

『82年生まれ、キム・ジョン』を通して ～性別ではなく自分に生きる社会に なしてほしい～

来る 2 月 12 日は韓国の旧正月だ。国内大移動だと言われるほど、お盆休みとお正月は家族が実家に集合する時である。私には結婚をし、子どものいる弟妹 3 名がいる。妹たちはまず夫の実家を訪ね、法事の準備、法事後の家族交流をしてから母が一人暮らしをしている自分の実家に帰省する。弟家族が母と法事をし終えてから、妹たちの家族が訪ねて来る。嫁に行くと当然夫の実家に尽くし、自分の実家は最後に回すことが常識である。誰から教わったわけではないが、既に嫁であった母の生き方からそれが当然の道理として固定された。数多い法事の食べ物や夜中まで作り、法事後の片づけまで賄う。「しょうがないよね」「当然でしょう」など、いつの間にか踏襲され、嫁の務めについて疑いもしなかった。

長編小説『82 年生まれ、キム・ジョン』（ジョ ナムジュ作、韓国 民音社、2016 年）は、キム ジョンという主人公を中心に韓国で生きる女性、それから家族の姿が主人公の生い立ちを追って綴られている。最初の出来事はお盆休みに起こる。お盆休みにジョンがデヒョン（夫）の実家に帰省し、義理の母と法事準備をして一段落していた時に、デヒョンの妹家族が訪ねて来る。妹もジョン同様に夫の実家で法事準備を終えて疲れている。デヒョンの母は娘を痛ましく感じ、法事の食べ物は買って使えばいいのにと娘の苦勞に触れる。

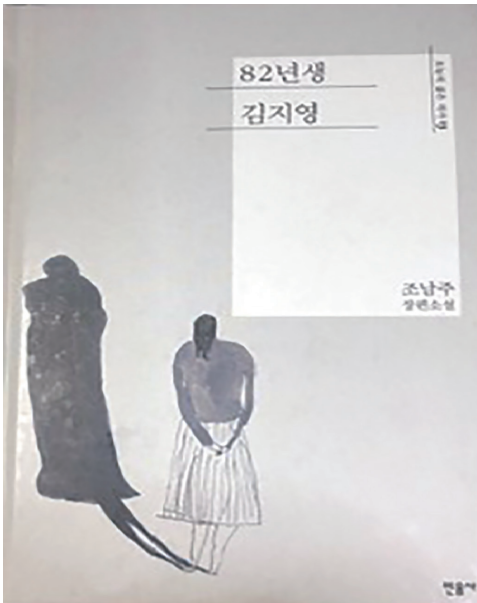


▲ （日本版）『82年生まれ、キム・ジョン』

一方、ジョンには家族のために法事準備をすることは当然であり、家族が集い、過ごす時間はジョンにとっても楽しいのではと訊ねる。その時、ジョンは既に別人、即ち自分の母の言動になり、「アイゴ（嘆く時に使う韓国語）、お母さん（中略）聞いてくれ」と、毎回の伝統祭日（お盆、お正月など）には、体調をくずすほど我が娘（ジョン）は大変な思いをしていることや、ジョンの実家には顔を出してすぐ発つほど向き合う時間がないことを伝える。それから、娘さん（テヒョンの妹）が大事なように、自分たちにはジョンも大事な娘なので、少しでも早く実家に来れるように心がけてほしいと訴える。面と向かって姑をはじめとするデヒョンらに訴えるジョンの言動に啞然として言葉を失うデヒョンの家族と、その場を何とかしようとする夫のデヒョン、それから別人になって発言したことすら自覚のないジョン本人がいた。嫁なら誰もが言いたい表には出せず、心に留まっていた苛立ちがスッとおろされる発言でもあった。

本書は、この出来事を始発点として、男性兄弟のために自分の進学をあきらめることを余儀なくされたジョンの母の生き様、ジョンの生い立ちや結婚・出産に至る時系列の出来事から、女性が男性ではないために受ける数々の差別について描かれている。さらに、子育てや家族に縛られ自由を失い、自分自身の変化に気づかないジョンと周りの人々の反応を通して、社会の矛盾が表面化された物語でもある。

2019 年には春風映画社創立作品として韓国で映画化され、2020 年 10 月中旬には日本でも上映開始された。小説の中では、公園に子どもを連れていきコーヒーを飲んでいたジョンに、通行人から「夫の稼ぎでのんびりとコーヒーを飲んでいる専業主婦はのんきな人生だ」と発言され、ショックを受けたジョンの姿が最後となる。読者には社会問題を問



▲ （韓国版）『82년생 김지영』

いかけたままのグレー色で物語は終止符を打つ。

一方映画では、カウンセラーからの治療を受け、ジョン自身が自分と向き合い、乗り越えた上で社会に一方踏み出した結論になっている。また、ジョンやジョンの母だけではなく、女性に厳しい韓国社会で迷いながらも、ジョンの悩みを共有しようとする夫デヒョンの姿から映される男性社会を覗くことができる。また、ジョンの病気をきっかけに、男性として優遇されてきたことに気づき始めるジョンの父親と弟、社会に立ち向かい我流の生き方を選ぶ姉に至る家族の姿から、複数の視点で韓国社会を覗き見ることができる。

少し私の話をする。前述にもあったように第一人と妹二人がいる。亡き父は弟が小さい頃から勉強ができない、家を継ぐほどではないと大事にするどころか関わろうともしなかった。むしろ、弟の成績などの出来ばえは、全て母の教育のせいだとまで言い続けていた。弟はずっと父の厳しさと無情な気持ちに隠れて迷いながら大人になった。父が求める男性に至らない弟にとっては重圧な扱いをされた子ども時代だと今になって振り返る。女性にとって生きづらい韓国は、女性より優遇されているとは言え、男性にとっても息苦しい側面がある。もちろん、性別が男性であるだけで、社会風潮に自分を乗せ、人としての感覚を失っている人が少なくないがそれは論外である。むしろ大多数かもしれない。只、「家を継ぐ」「男性だから」を求められて生きる男性にとっても自由に生きる権利は保障されていない社会であるとも解釈できる。即ち、本来であれば生きる主体がどの性であれ、生き方は周りに左右されず、自分を知り、自分らしさを発揮することが選択できることを前提にしなければならぬだろう。

私はキム ジョンより 10 年より前に生まれ、28歳頃まで韓国で暮らしていた。前掲書や映画をどう捉えるかは人それぞれであろう。もし、社会が歪んでいたとしたら、その社会状況を正しい眼差しで判断し、国や民族に関わらず、人として生き、大事にされるために、立ち向かう勇氣と知恵が男女を問わず必要だと改めて感じる。

実際、本書の物語の始発点でもある 1982年は、女兒100名対男児が 106.8名の出生性比で、1990年には男児が 116.5名に至った。当時に生まれた 20 代から 30 代の女性が現在、子どもを産み育てる子育て世代でもある。韓国は合計特殊出生率が 2018 年から 1 を下回り、2020年には 0.836 になっている（「行政安全部住民登録人口統計」による）。

生活や人との関わり、そのものが儒教に基づいている韓国では、昔日本の「家制度」のように、家を継ぐ父や兄、弟を立てていくことが、先祖代々を繁栄させる認識が未だ

根強く存在する。そのことが生まれてくる子どもを性別で分けるという風潮を生み出した。さらに、女性の社会進出の増加が加わり、結婚したくない女性、子どもを産まない女性が増えることにもつながった原因の一つでもある。家を繁栄させるための思想が、これから家を・国を担っていく次世代の子どもが生まれない「今」を生み出したとも言えよう。全年齢の保育料無償化・不妊治療費保障など、国をあげて取り組む少子化対策に学ぶことは大きい。

しかしながら、保育学を専攻とする私から敢えて『82年生まれ、キム・ジョン』からの示唆点を取り上げるのであれば、目に見えない思想が生み出した原因が現在の少子化現象の根柢にあることに気づき、今後どのような社会にしていくかを勘案していただきたい。

（韓 仁愛・現代人間学部心理教育学科講師）

Gender forum

共通教養科目

「性とジェンダー」を通じて考えたこと

井上輝子先生にお声がけいただき、共通教養課程のオムニバス科目である「性とジェンダー」の担当に加わったのは 2006 年度です。その後、科目名は「性とジェンダー A」に変わり、杉浦郁子先生がコーディネータを務められるようになり、また担当教員の入れ替わりもあるなか、2018年度まで分担してまいりました。

「ジェンダーと ICT（情報通信技術）」というテーマで話をしてきたのですが、最初の数年は「男の子のゼータクなおモチャが女の子の必須アイテムになるまで」というプロットで臨みました。アマチュア無線や電子工作を趣味とするもっぱら男性の興味の対象だったマイコンが、パソコンに進化し、ネットワークという場が生まれ、パソコン通信が普及します。趣味の対象であった機械がコミュニケーション・ツールへと変化したのです。

1980年代後半のパソコンの CM には、メーカーも「男の子」向けのものであると認識していたからか、女性アイドルが起用されていました。女性＝機械オンチというジェンダー・バイアスとも密接に結びついた現象です。ICT は男性の技術として社会的に受容されました。

その後の ICT の発展はご承知のとおりです。ポケベルがケータイになり、インターネットが普及し、ICT は技術自体に興味関心が向けられるものではなく、コミュニケーションを支える技術基盤となりました。1995年以降の日本です。この頃から状況が変化します。

たとえば、ケータイ・メールのやり取りは、受信後、速やかに返信するといったマナーにおいて、女性に対してより強い制約が働いていました。授業でも、「女子だからメールのやりとりをこまめに」、「男子だからずばらなメール返信も許容される」といった認識を共有する学生が大半でした。したがって、メールのやり取りが苦手な女子学生は、ささやかながらも慢性的な生きにくさを感じずというジェンダー・トラブルを抱えていたわけです。

しかし、2010年頃から、学生の反応が変わります。ICT を完全にジェンダー・フリーなものとして捉える学生が増えてきました。ICT の利活用に関する種々の調査では、ジェンダーをパラメータとした集計が行われてきました。ジェンダーに応じ、利用する ICT 機器・サービスに違いがあるのか、あるいは利用時間に違いがあるのかといった具合です。これらの集計において、性差は次第に有意ではなくなります。代わって、とくに若者の ICT との向き合い方においては、「友達」の多寡が重要なものとなってきました。

「ひとりが怖い」・「つながっていたい症候群」・「友だち地獄」など、関係するキーワードは枚挙にいとまがありません。ケータイや SNS の普及によって「友達」の数が可視化されるなか、「友達」がいないことを恥ずかしいと感じず状況が生まれました。

「便所メシ」もよく言及されました。ひとりで昼食をとることは嫌ではないものの、ひとりで食事をしている姿を知人に見られ、「友達」がいないと思われることが恥ずかしいという気持ちによって生まれた行為です。この時期の授業では、ICT を基盤とする若者のパーソナルなコミュニケーションにおいて、ジェンダーがあまり意識されなくなったというプロットで、学生に頷いてもらうことができていました。学生にとって、ジェンダーよりも、「友達」の多寡がよりいっそうレリバントになっていったようです。

図書・情報館は、書庫階のキャレルで食事をする学生が目立ったため、イートインスペースを設けました。食事は 3 階のイートインスペースに限定し、それ以外では厳禁となったのです。多くの教職員は、学食も混雑しがちで、昼食をとる場所が少ないため、この対応に好意的でした。しかし、「便所メシ」のロジックをふまえれば、キャレルで食事をしていた学生は本当に「便所メシ」になってしまったのではないのでしょうか。一緒に食事をする「友達」がいないため、

目立ちにくい図書・情報館のキャレルで昼食をとる、万が一、知人に見られても、授業の予習をしている、レポートを書いている、その合間におにぎりを頬ばり、サンドイッチをつまんでいるという状況を演出できていたはずです。このような学生はイートインスペースに設置された大きなテーブルで食事をとることができません。ひとりであることが分かってしまうからです。

しかし、さらに状況が変化します。これも学生の授業中の指摘で教えられました。スマホをいじっていれば、ひとりで食事することは恥ずかしくないとのこと。いまはたまたま学食でひとりで食事をしているが、実は「友達」が多く、LINE などの SNS でやりとりをしている風を装えるからです。ICT の発展によって実現したスマホという高機能な情報通信機器は利用者の属性を仮装する機能も果たしうるので。ときを同じくし、全国の大学の学食で、ひとりで食事をするのが恥ずかしくない仕切られた座席が設けられるようになりました。「スピードシート」といった正式名が付与されるのですが、ありていに「ぼっち席」と呼ばれることの方が多いようです。

若者の生活空間ではジェンダーが後景に退き、「リア充」であるか否か、「コミュ障」であるか否か、「勝ち組」であるか否か、学校カーストにおける位置どりなど、レリバントな指標が複雑化したのです。2018年度までの授業を通じ、学生とのやりとりのなかでおおむねこのようなことを考えてきました。

そして 2020年、新型コロナウイルスによって社会構造が丸裸となります。経済活動の停滞のしわ寄せが女性労働者によりいっそう影響を及ぼしていることなどから、依然としてジェンダーが重要な概念であると再確認できました。学生の視界からジェンダーが消えつつあったのは、けっしてジェンダーに起因する諸問題が解消されたからではなく、たんに見えにくくなっていただけでした。その見えにくさに ICT が関与しているという認識も、「性とジェンダー」を通じて考えてきたことの延長線上で得られたものです。

「学生と教員による自由な研究と学習の共同体」という梅根悟の大学観は、ことのはに載せることは容易でも、なかなか実践できません。「性とジェンダー」は自分にとってその小さな実験の場となっていました。この稿をまとめるにあたり、つたない話を聞き、貴重なフィードバックをくれた学生の皆さん、関係する先生方には、あらためて感謝しています。ありがとうございました。

（杉本 昌昭・経済経営学部）

おわりに。－2020年に思ったこと

江戸時代初期からの実家の先祖の生没年を見る機会があった。正徳四（1714）年は、春からの数か月間に、立て続けに4人も亡くなっている。何かあったのだろうか……。実家は広島県南西部の瀬戸内海にある。年表を調べると、この年の春先に「広島藩の島嶼で時疫が発生した」との記述を見つけた。その時は、これ以上のことはわからなかった。しかし、ごく最近、広島県南東部に位置する尾道の神社のHPに、正徳四年の疫病のことが書いてあると地元出身の友だちが教えてくれた。

私の実家は、江戸時代の北前船の航路上にある。尾道の町も海運の要衝であり、1714年の瀬戸内海では、疫病が船によって拡がり、大きな被害をもたらしたのだろう。この疫病で我が家は成人男性と男児それぞれ2人を亡くしたが、明治以前は女性の生没年の記録がないので、被害はもっと大きかったのかもしれない。私たち人類は感染症に繰り返し襲われてきた。医療も衛生設備も確立されていなかった江戸時代の感染症に対する恐怖はどれほどのものだったのか。

2020年には、新型コロナウイルスによる感染症が世界中で猛威を振るった。こんなに医療が発達しているのだから、すぐに終息するはず……と最初は呑気に思っていた。しかし、感染症のリスクや恐怖から解放は、数多の感染症のひとつずつに対して特効薬や治療法が開発されてきたおかげである。治療薬がないのであれば、その危険性は江戸時代の疫病と大差ない。とんでもない思い違いをしていたものだ。

ところで、2020年を思い返すに、家にいることが多かった。放置していた多くの書籍や映像に目を通す時間があったのだが、その中で何故かいたく感動したのが、映画『翔んで埼玉』（魔夜峰央原作・武内英樹監督2019）だ。既に述べたが、私は埼玉県出身ではない。しかし、なぜこの映画に「ぐっ」と来たかといえば、劇中の描写に「心当たり」があったからだと思う。ここでは本編の物語には触れないが、劇中の埼玉県人が受ける仕打ちがあたかも現実の差別を彷彿とさせ、コメディなのに気楽に笑えない。出身地に対して「ダサイ」などという実に軽々しい揶揄や眼差しも、実は地方への蔑視そのものであり、社会における多くの差別と同じ構造を持っているのではないか。「何だか身につまされるな……」などと映画を観ながら考えていた、そんな時に報道される「Go to トラベル」のごたごた劇に遭遇する。

「東京（大都市）こそ素晴らしい」という考え方を、仮に「東京（大都市）一極集中主義」と名付けるが、これと「Go to

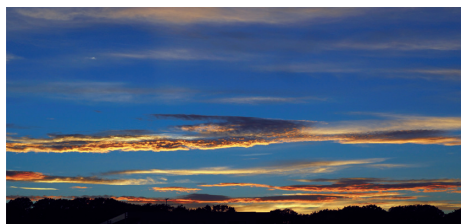
トラベル」は一直線に繋がっている。これが誇り高い一地方出身者としての私の意見だ。1960年代生まれの私が自らの半生を振り返るに、子ども時代の地元は、大都市に出ることが、すなわち「勝ち組」であるとの価値観が巷を支配していたような気がする。私もそんな地方から都市に移動した一人であることは言うまでもないが、あの時はなぜか慣れ親しんだ故郷を出ることに何の躊躇いもなかった。今思えば、不思議なことである。

こうして、人が、地方から大都市へ大移動した。その結果、大都市での「生産」と「消費」の拠点づくりには成功したが、それに引き換えるようにして地方は衰退していく。しかし地方の空洞化は、個人の意思というよりは、むしろ「国策」ではないのか。「手厚いところ（都市）」と「そうでないところ（地方）」をあえて作って、さらなる格差を生んだ。この二極化の手口は今も昔もあらゆる所で見られる。まったくもって「公平な再分配」という概念に乏しい。

働き手が減った地方には、経済的にとても「美味そう」なミッション（例えば「地域の整備」「原発」「基地」等）があてがわれたような気がする。そして一般的にして最大のミッションは、「観光業」だ。日本中の至る所で「観光振興」の旗振りが行われ、観光と宿泊の施設が津々浦々にできたことを思い出す。あの頃、うちの地元にも素敵なテーマパークが開園し、その名を冠した鉄道の駅もできた。しかし今はもう営業していない。建物だけが寂しく残っている。こうした全国的な観光事業もバブル崩壊をきっかけにして、立ち行かなくなるところがいくつも出てきた。これらの地方へのミッションは、国の政策だ。しかし、どれもこれも大都市での繁栄が前提で、地方の経済と生活を守るどころか、むしろ破壊してきたのではないだろうか。

コロナ禍において、観光を主たる産業とする地方経済への打撃が危ぶまれるのに、「Go to トラベル」は弱った地方への感染拡大をもたらす。なんだか矛盾だらけだ。キラキラの大東京は、いまや感染症のリスクが高い場所だ。「一極中心主義」の限界、欺瞞、そしてあらゆる差別が浮き彫りになっているのを、今、私たちは目の当たりにしている。都市も地方もみんなの限界はどんどん近づいているのに、もう個人の力だけではどうにもならないのに、政治はいったいどっちを向いているのだろうか……。感染症の終息をひたすら祈った、そんな巣ごもり生活で思ったことである。

（阿野 理香）



▲ 2020年夏の夕陽(自宅ベランダにて撮影)